

Title	ボイス研究文献・年譜(ヨゼフ・ボイス:ハイパーテキストとしての芸術)
Sub Title	
Author	三本松, 倫代(Sanbonmatsu, Tomoyo)
Publisher	
Publication year	1999
Jtitle	Booklet Vol.5, (1999.) ,p.96- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000005-04211190

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文献

(三本松 倫代・編)

文献と年譜は、1996年慶應義塾大学アート・センター発行の『ヨーゼフ・ボイス／感性と社会』に掲載されたものに訂正と追加を行った。欧文文献の配列は、単行書・展覧会カタログ、逐次刊行物に大別して年代順とし、同年に発行されたものは筆者のアルファベット順に記載している。なお、作成にあたって東京都現代美術館・渡部葉子氏、神奈川県立近代美術館・水沢勉氏、栃木県立美術館・山本和弘氏はじめ多くの方々にご協力いただいた。記して謝意を表したい。

●国内文献

1. 単行書

オン・サンデーズ (編) 『ヨゼフ・ボイス 作品と資料』 ISSHI PRESS, 1984年。

西武美術館『ドキュメント ヨーゼフ・ボイス／TVプリンター・マガジン』ペヨトル工房 (共同刊行 WAVE, SPN)、1984年。

『ビデオブック ヨーゼフ・ボイス (Ein Dokument: 1984/ Joseph Beuys in Japan)』ペヨトル工房、1984年 [上記の本と84年のボイス来日の模様を記録したビデオのセット。『EOS』04としても販売]。

山本育夫『ボイスの印象』甲府、書肆・博物誌、1984年。

フォルカー・ハーラン／ライナー・ラップマン／ペーター・シャータ『ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻』伊藤勉他訳、人智学出版社、1986年 [ボイスの講演三本を収録] [Volker Harlan/Rainer Rappmann/Peter Schata, Soziale Plastik, Materialien zu Joseph Beuys, 3. erweiterte und ergänzte Aufl., Achberg, Achberger, 1984]。

ヨーゼフ・ボイス [述]『積極的中立：資本主義と共産主義の克服』針生一郎訳、FIU JAPAN、1986年。(Joseph Beuys, Aktive Neutralität : Die Überwindung von Kapitalismus und Kommunismus, Wangen, FIU, 1985.)

岡林洋編『ヨーゼフ・ボイス：清里現代美術館所蔵の作品を中心に』京都、岡林洋、1992年。

ヨーゼフ・ボイス／ミヒャエル・エンデ『芸術と政治をめぐる対話』丘沢静也訳、岩波書店、1992年 [Joseph Beuys/Michael Ende, Kunst und Politik. Ein

Gespräch, Wangen, FIU, 1989]。

ハイナー・シュタッヘルハウス『評伝ヨーゼフ・ボイス』山本和弘訳、美術出版社、1994年 [Heiner Stachelhaus, Joseph Beuys, Revised edition, Düsseldorf, ECON, 1991 (1.Aufl., Düsseldorf, Classen, 1987)] [美術手帖N.652-672に連載]。

『芸術の社会性——ヨーゼフ・ボイスからの投影』武蔵野美術大学平成5年度共同研究活動記録報告書、武蔵野美術大学、1995年。

慶應義塾大学アート・センター『ヨーゼフ・ボイス／感性と社会』、1996年。

ビデオ解説 (ギュンター・ミナス/前田富士男・足立典子訳) (4-17頁)

「ヨーゼフ・ボイス——全ての人間はアーティストだ」[ボイスに敬意を表して]

「ユーラシアの杖」[ヨーゼフ・ボイス：ケルティック] [清掃]

「アートとアーティストについて——ヨーゼフ・ボイスとのインタビュー」

「ヨーゼフ・ボイスの発言」[ヨーゼフ・ボイスと生徒たち]

「ヨーゼフ・ボイスと街の人々」[聴衆との対話]

「私はアメリカが好き——アメリカは私が好き」[ドクメンタ6のための衛星放送]

「ジョージ・マチューナスを偲んで」[コヨーテⅢ] [資本]

「オリーブストーン——芸術の新しいアイデア」

講演者プロフィール/シンポジウム・コメンテーター (18頁)

文献 (国内/海外) (三本松倫代) (19-34頁)

ヨーゼフ・ボイス年譜 (1921-1986) (三本松倫代) (35-47頁)

[1996年11月19-21日慶應大学で開催のビデオ上映とシンポジウムのための資料集]

2. 逐次刊行物

・ 1970

針生一郎「ヨゼフ・ボイス——不気味な、関係の形而上学 [明日をひらく芸術家・11]」[美術手帖] v. 22, n. 322 (1970.1) 194-219頁。

ヨゼフ・ボイス「反芸術への洞察——〈KUNST〉誌のインタビューに答えて」針生一郎訳、[美術手帖] v. 22, n. 322 (1970.1) 220-223頁。

・ 1971

東野芳明「ストックホルムのヨゼフ・ボイス——回顧展をみて」[美術手帖] v. 23, n. 336 (1971.5) 190-203頁。

峯村敏明「ラインの橋からの一瞥 地方性を超えるその美術 (ドイツの現代美術)」[美術手帖] v. 23, n. 349 (1971.12) 98-108頁。

・ 1972

飯田善國「〈ドクメンタ〉になにをみた」『美術手帖』 v. 24, n. 361 (1972. 10) 85-115頁 [ドクメンタ5の報告。ボイスは〈直接民主主義組織のための100日間情報センター〉を設置、会期中聴衆と討論を行う]。

・ 1976

中原佑介「報告 ヴェネチア・ビエンナーレ1976—再生と方向」『美術手帖』 v. 28, n. 412 (1976.10) 170, 192-211頁 (図版171-191頁)。[ボイス:〈市電の停車場〉]

・ 1977

峯村敏明「メディア弁別の契機—70年代の冷夏の終わりに」(特集/現代美術の形式と形態 [ドクメンタ6に見る])『美術手帖』 v. 29, n. 425 (1977. 10) 55-67頁。[ボイス:インスタレーション〈作業場の蜂蜜ポンプ〉]

・ 1980

近藤竜男「ヨゼフ・ボイスと安泰なニューヨーク (海外・展覧会・ニューヨーク)」『美術手帖』 v. 32, n. 459 (1980. 1) 20-21頁。[グッゲンハイム美術館でのボイス回顧展の報告]

——「ボイスはアメリカに何を残す (海外・展覧会・ニューヨーク)」『美術手帖』 v. 32, n. 459 (1980. 2) 20-21頁。[ボイス回顧展報告2]

・ 1981

今泉省彦「黒板の前にレクチャーするボイス」『美術手帖』 v.33, n. 475 (1981. 1) 139-156頁。

ヨゼフ・ボイス「略歴/作品歴 (自筆による)」『美術手帖』 v.33, n. 475 (1981. 1) 156-157頁。

ローレイエン・ウェイヤース「ヨゼフ・ボイス その生活と製作」(インタビュー、高島平吾訳)『美術手帖』 v. 33, n. 487 (1981. 10) 154-160, 169-177頁。

——「ヨゼフ・ボイス 彼の家、彼のスタジオ そして彼の仕事場」(写真:ジョン・ヴォーン)『美術手帖』 v.33, n. 4 (1981. 10) 87, 161-168頁。

・ 1982

編集部編「来日アーティストのプロフィール——マクレーン/グラハム/パオリーニ/ビュラン/ボイス」『美術手帖』 v. 34, n. 502 (1982. 10) 134-136頁。

・ 1983

「特集 ヨーゼフ・ボイス」『美術手帖』 v. 35, n. 509 (1983. 4) 18-92頁。

ナム=ジュン・パイク「ボイス／解釈的会話」18-23頁。

若江漢字「社会的彫刻の意味するもの／S氏への手紙」24-28頁。

高島平吾訳・編「アンソロジー／幻視の行為者」37-79頁。

ローレイエン・ウェイヤース「BEUYS VS DALAILAMA レポート」松岡和子
訳,80-92頁。[インタビュー]

南條史生「ボイス来日中止の顛末」『EOS』03 (1983.6) 28-39頁。

若江漢字「ボイスの足型」『アトリエ』n. 681 (1983.11) 42-44頁。

・1984

若江漢字「やどり木の冠」(連載:ボイス・ノート-1)『アトリエ』n. 683 (1984.1)
40-42頁。

——「私の個展から」(連載:ボイス・ノート-2)『アトリエ』n. 684 (1984.2)
46-48頁。

——「ボイスの作品の時代と傾向について」(連載:ボイス・ノート-3)『アト
リエ』n.685 (1984.3) 73-75頁。

荻原佐和子「連載 ヨゼフ・ボイスあれこれ その1-4」『ミュージアム・レポート』
(西武美術館月報) n.1-4 (1984.3-6)

署名(弱)「ある架空の会議から」『ミュージアム・レポート』(西武美術館月報)
n.4 (1984.6) 3頁。

若江漢字「ボイスの作品の時代と傾向Ⅱ」(連載:ボイス・ノート-4)『アトリエ』
n. 686 (1984.4) 93-96頁。

——「ボイスの作品の時代と傾向Ⅲ」(連載:ボイス・ノート-5)『アトリエ』n.
687 (1984.5) 77-80頁。

——「汝の傷」(連載:ボイス・ノート-6)『アトリエ』n. 688 (1984.6) 62-64頁。

「ヨーゼフ・ボイス、日本へのメッセージ」(インタビュー:植松奎二)『美術手帖』
v.36, n.527 (1984.6) 138-145頁。

「特集 ヨーゼフ・ボイス」『第三の道』n.2 (1984.6)。

河西善治「『国民投票運動』について」13-15頁。

第三の道運動／自由国際大学「緑の基本綱領」石井良訳,37-46頁。

ヨーゼフ・ボイス／ヨハネス・シュトゥットゲン「自由国際大学のモデル—蜂蜜ポ
ンプ—」中村康二訳49-53頁。

ヨハネス・シュトゥットゲン「FIUとは何か」宮坂英一訳,54-57頁。

河西善治「『第三の道運動』をめぐる状況」58-61頁。

フランク・マイヤー／アイヴィント・オルセン(インタビュー)「芸術=資本」

深沢英隆訳,75-91頁。

深沢英隆『「ボイス現象」の底にあるもの』92-94頁。

河西善治「ヨーゼフ・ボイス来日をめぐって」95-96頁。

森口陽「ボイスを迎えて——芸術を孤独の領域から開放」『朝日新聞』1984年6月13日夕刊。

無記名「現代美術の異才——ボイスとパイク（文化往来）」『日本経済新聞』1984年6月20日。

赤瀬川原平「パイクの居眠り」『新美術新聞』1984年6月21日。[草月ホールでのパフォーマンスのレポート]

伊藤俊治「“社会彫刻” 目ざす芸術——ヨーゼフ・ボイスの初個展によせて」『読売新聞』1984年6月29日夕刊。

針生一郎「ボイス来日が残したもの——熱っぽく『日本にも自由国際大学を!』」『毎日新聞』1984年6月30日夕刊。

ヨーゼフ・ボイス「東京講演『芸術と社会』完全収録」（通訳:三島憲一）『美術手帖』v.36,n.528（1984.7）113-128頁。

無記名「嗚呼ボイス 来てしまったらタダの人」（ART NEWS）『芸術新潮』v. 35, n. 7（通巻415）（1984.7）32-35頁。

若江漢字「ボイスからのメール・アート」（連載:ボイス・ノート-7）『アトリエ』n. 689（1984.7）62-64頁。

『ミュージアム・レポート』（西武美術報）n. 5（1984.7）。

署名（礼）「ヨーゼフ・ボイス、東京滞在日誌」2-5頁。

森口陽「ボイスを迎えて」6頁。[朝日新聞6/13の再録]

林牧人「ヨーゼフ・ボイスはいかに作品を制作したか」7-9頁。

「特集 ボイス+パイク」『美術手帖』v. 36, n. 530（1984.8）13-81頁。

安斎重男（写真・文）「JOSEPH BEUYS IN TOKYO」14-25頁。

ボイス+パイク+針生一郎（録音構成）「Good Morning, Mr. Beuys and Paik!」26-33頁。

針生一郎「ボイスとパイクの間で」34-39頁。

中沢新一「ボイス、パイク、自然」48-52頁。

粉川哲夫「パイク/ビデオ政治の仕掛人」53-57頁。

「兵法ビデオ・ファンタスティカ」（対談:ナム=ジュン・パイク+磯崎新）66-

81頁。

若江漢字「8日間の日本」(連載:ボイス・ノート-8)『アトリエ』n. 690 (1984. 8) 69-76頁。

——「ボイスとの出会い」(連載:ボイス・ノート-9)『アトリエ』n. 691 (1984. 9) 94-97頁。

海野弘「ボイスはホテルである」(文化労働者日記8)『アトリエ』n. 691 (1984. 9) 104-108頁。

〔特集 ボイス1984. 5. 29-6. 5〕『アール・ヴィヴァン』n. 14 (1984. 9) [カセット・テープ付]

森口陽「メモ1983. 11. 9-1984. 5. 29」2-7頁。

荻原佐和子「メモ1984. 5. 29-6. 5」8-21/36-37/48/53-56頁。

〔6/2・東京芸術大学における対話集会〕21-34頁。

秋山邦春「『ヨーゼフ・ボイス VS ナムジュン・パイク』コンサート・パフォーマンス覚え書」38-44頁。

〔6/3・対談—ボイス+東野芳明〕(要旨) 46-47頁。

〔6/4・対談—ボイス+中沢新一〕48-53頁。

三島憲一「ボイスとドイツ哲学の現在 [但し本文タイトルでは“伝統”]」58-66頁。

ヨーゼフ・ボイス+ナムジュン・パイク「アクション『2台のピアノによるコンサート・パフォーマンス』1984. 6. 26:00p. m.」カセット・テープ (1本)。

若桑みどり「芸術の原点への復帰——ヨーゼフ・ボイス論 (特集 パフォーマンス)」『ユリイカ』v. 16. (1984. 9) 170-176頁。

長谷川祐子「羊の相手をした老コヨーテ——東京芸大でのボイス (特集 パフォーマンス)」『ユリイカ』v. 16 (1984. 9) 176-179頁。

「ヨーゼフ・ボイス ドキュメント」『EOS』04 (1984. 9) [ビデオ付、単行本の項参照]。

〔ボイス全語録 (通訳/三島憲一):共同記者会見/レクチュア・芸術と社会/インタビュー (武邑光裕)/学生との対話集会/草月ホール・対話集会/プレス・インタビュー/対談・中沢新一〕。

東野芳明,ヨーゼフ・ボイス (対談)「コヨーテからのメッセージ」『世界』n. 468 (1984.11) 296-309頁。

・1985

芥川喜好「咳払と『ボイス情報』」『Panoramic Magazine is』28、1985年、54頁。

茂木博「J・ボイスの芸術思想について——東京での講演を中心に——」

『東京造形大学雑誌 A』2号、1985年、14-28頁。

ヨーゼフ・ボイス「秘儀は中央駅で起こる」訳者不明、『第三の道』n.3 (1985. 1)
50-64頁。

フランク・マイヤー「芸術と社会機構」樋口純明訳、『第三の道』n.4 (1985. 7)
2-10頁。

——「芸術—意識の形成か、社会の編成か」樋口純明訳、『第三の道』n.4 (1985.7)
11-20頁。

河西善治「ボイスとエンデの『芸術と政治』をめぐる対話に参加して」『第三の道』
n.4 (1985.7) 22-28頁。

ヨーゼフ・ボイス「緑の党こそ芸術に緑の主要課題があると認めてほしい」中村康
二訳、『第三の道』n.4 (1985.7) 30-42頁。

ヨハネス・シュトゥットゲン「自由ならぬ——自由空間と自由時間」深沢英隆訳、
『第三の道』n.4 (1985.7) 58-61頁。

・1986

荻原佐和子「追悼ヨーゼフ・ボイス」『ミュージアム・レポート』(西武美術館月報)
n.25 (1986)、10-11頁。

——「ヨーゼフ・ボイス『社会彫刻』誕生の経緯」(特集 80年代前半に突出した
海外人気アーティスト)『美術手帖』v.38, n.564 (1986.10) 82-91頁。

「特集/ボイスとエンデ」『第三の道』n.5 (1986.5)。

ヨーゼフ・ボイス「この炎を守れ!」樋口純明訳、2-6頁。[W・レームブルック賞
受賞講演]

樋口純明「炎は、さらに燃えひろがる」7-10頁。

ルーカス・ベックマン「ヨーゼフ・ボイスを悼む」樋口純明訳、11頁。

河西善治「ヨーゼフ・ボイス、内部からの革命者」18頁。

ライナー・ラップマン「〈ボイスとエンデ〉——芸術と政治に関する会話」樋口純
明訳、19-26頁。

樋口純明「解説 エンデとボイス—異種の極性」2-39頁。

・1988

水沢勉「起点から起点へ——『ドイツ70年代グラフィック展』をみて」『みづゑ』
n.947 (1988年夏) 104-107頁。

山梨俊夫「ヨーゼフ・ボイス回顧展 (海外ニュース From Berlin)」『美術手帖』

v. 40, n. 596 (1988.6)、169-172頁。

・1990

無記名「ヨゼフ・ボイス（ゼーマンのアーティストたち／アーティスト・ファイル1）」（特集・20世紀を美術で読む／ハラルド・ゼーマン）『アトリエ』n. 758 (1990.4)、22頁。

初瀬部真一「ボイス・メモ」『非』v.6 (1990.夏・秋) 4-9頁。

・1991

松本夏樹「秘儀の伝導者としてのボイス」（ドイツの力と闇——キーファーとボイス）『みづゑ』n. 958 (1991年春) 13-30頁。

上田高弘「芸術と日常—反芸術・汎芸術/ヨーゼフ・ボイス—国境を越えユーラシアへ」（展覧会季評）『みづゑ』n. 961 (1991年冬) 92-93頁。

・1992

こぐれひでこ「草葉の陰でボイスは、パーティを喜んだであろうか（ART）」『CREA』(1992.2)、143頁。

岡林洋「ヨーゼフ・ボイス——流動する形式と彫塑的なもの」『人文学』（同志社大学人文会）152 (1992.3) 1-31頁。

「特集 ヨーゼフ・ボイス」『非』v.9 (1992.4) 5-35頁。

関根勢之助「不意の侵入者——ボイス」5-6頁。

津山昌「『レオナルド・ダ・ヴィンチの「マドリッド手稿」のためのドローイング』」7-20頁。

初瀬部真一「BEUYS MEMO II——ボイスは、ボイスであってボイスではない」21-27頁。

林昭博「ヨーゼフ・ボイス」28-29頁。

尾山景子「アート独創日記」30-33頁。

「特集/ヨーゼフ・ボイス カオスと創造」『美術手帖』v. 44, n. 652 (1992. 4) 28-90頁。

ゲオルク・ヤッペ「拡張された芸術概念 ヨーゼフ・ボイスについて」中山純訳、35-42頁。

山本和弘「スワンの涙 ボイス解釈の手がかりとしての動物とエコロジー」61-66頁。

編集部構成「ヨーゼフ・ボイス年表 アクションを中心に」68-71頁。

針生一郎「革命の芸術家ボイスの横顔」72-77頁。

鷹見明彦/山本和弘/編集部「ボイスをめぐる18人の肖像」81-86頁。

武邑光裕談/編集部構成「芸術のリチュアル メディアとしてのボイス」87-90頁。

ハイナー・シュタッヘルハウス (連載) 「評伝 ヨーゼフ・ボイス」山本和弘訳、
『美術手帖』v.44, n. 652 (1992. 4)～v. 45, n. 672 (1993.12)。[全20回/単行書欄
参照]

・1993

山崎浩一「すばる Book Garden ミハエル・エンデ/ヨーゼフ・ボイス『芸術
と政治を巡る対話』岩波書店」『すばる』(1993年2月) 329頁。

山本和弘「書評『対談 ミハエル・エンデ/ヨーゼフ・ボイス』について (岩波書
店刊)」「日本図書新聞」2136号 (1993年2月6日号)。

西原珉「死後7年にして見える真実。『ヨーゼフ・ボイス』展」『SPA!』(1993年9
月1日) 127頁。

無記名「社会的文脈にこだわったボイスの彫刻 (文化往来)」『日本経済新聞』
1993年9月2日。

伊藤憲夫「社会を治癒する芸術の使徒『ヨーゼフ・ボイス』展」アサヒグラフ
(1993年9月17日) 92頁。

森村泰昌「作品になった人 ヨーゼフ・ボイス (特集・現代美術入門講座『新・戦
後美術史概説])」『太陽』1993年11月、30-31頁。

・1994

ペーター・ヘルプストロイト「だれが作ったのか? ヨーゼフ・ボイスの疑わしき
『ウィーン・ブロック』」『アトリエ』n. 803 (1994.1)、70-79頁。

ペーター・ヘルプストロウト [ママ]「ヨーゼフ・ボイス展 (世界のアート最前線)」
『アトリエ』n. 807 (1994.5)、109-115頁。

署名 (三)「『芸術を大衆に』果てぬ夢の跡『冬のメルヘン』展」『朝日新聞』1994
年1月6日夕刊。

菅木志雄「ヨセフ・ボイス『二十世紀の終焉』(大地の石十選 (10))」『日本経済新
聞』1994年7月1日。

「特集 現代ドイツの時代精神 マルチプル——ボイス、キーファー、リヒター、
ボルケ」『版画芸術』n. 85、(1994) 75-127頁。

「ヨーゼフ・ボイス」75-91頁。[図版と解説]

山本和弘「ヨーゼフ・ボイスのマルチ笑法」92-97頁。

「ミュージウム・ハウス・カスヤ ボイスと現代美術の競演 (美術館散歩)」98-99頁。

市原研太郎「ドイツ現代美術の“時代精神”」114-127頁。

「ドイツ現代美術関連年表」115-123頁。

ハラルド・ゼーマン／ペーター・ヘルプストレウト（対談）「ヨーゼフ・ボイス」
『アトリエ・インターナショナル』n. 807 (1994.4) 2-25頁。

ケイ・ラーソン「ヨーゼフ・ボイス:再びヨーロッパへ」(連載:現代美術を理解する
22)『アトリエ・インターナショナル』、n. 807 (1994.4) 70-77頁。

堀越千秋「展覧会に見る二つのスペイン気質 (アート・アトラス)『朝日新聞』
1994年5月14日夕刊。

・ 1995

倉林靖「ヨーゼフ・ボイス」(特集 フルクサス発 インターメディア・アートの出
発点から)『スタジオ・ボイス』v. 232 (1995.4) 28頁。

——:「ボイス以後——革命のアクションの系譜」(特集 フルクサス発 インター
メディア・アートの出発点から)『スタジオ・ボイス』v. 232 (1995.4)、36-37頁。

無記名「現代美術とミュージアム 1/MUSEUM HAUS KASUYA」『アクリラート』
v. 26, 1995、11-13頁。

「ボイス×キーファー×クッキ×クネッリス」田辺克文訳,『フリークアウト』v. 7
(1995) 54-57頁。[4人による座談会の記録。Jacqueline Burckhardt
(Hrsg.) ,Ein Gespräch/Una discussione, Joseph Beuys, Jannis Kounellis, Enzo
Cucchi, Anselm Kiefer, Gespräch in der Kunsthalle Basel am 28.-29. 10. 1985,
zwischen Joseph Beuys, Enzo Cucchi, Anselm Kiefer, Jannis Kounellis und Jean
Christophe Ammann, Zürich, Parkett, 1986からの抄訳]

・ 1996

岡林洋「ヨーゼフ・ボイスの素描の記譜法—レオナルド『マドリッド手稿』との関
連で」鹿島美術財団年報 (鹿島美術財団) 13 (別冊) 1996年, 581-593頁。

水沢勉「身体、この癒されぬもの」(「身体と表現1920-1980」展をみて2)『現代
の眼』n.497 (1996.4-5) 9-10頁。

松本透「ボイス研究 陣容整う」『読売新聞』1996年4月10日夕刊。[1995年のシン
ポジウム報告]

山本和弘「社会築くボイスの思想待たれる第2の『ゲート』(国際文化交流セミナー:
ワイマールから報告 (下))『下野新聞』1996年8月27日。

無記名「ヨーゼフ・ボイスの美術館、来春開設（海外文化 ドイツ）」『朝日新聞』
1996年11月5日夕刊、5頁。[シュロス・モイラント美術館]

・1997

近藤幸夫「ボイス・シンポジウム雑感」『ARTLET（慶應義塾大学アート・センター）』7号（1993.3）、5頁。

——「ルドルフ・シュタイナー『黒板ドローイング展——地球が月になるとき』
——モンドリアン、ブランクーシそしてボイスへ（from Exhibition）」『BT美術手帖』v.49, n.740（1997.4）126-133頁。

無記名「シュタイナー研究者バルター・クーグラールさん（ことば抄）『朝日新聞』
1997年5月15日夕刊、3頁。[ワタリウム美術館でのシュタイナー展でボイスとシュタイナーについて講演]

無記名「清里現代美術館（特集2／那須・清里の美術探訪）『アトリエ』n.828
（1997.7）、92-97頁。

無記名「ドイツの古城でボイス作品見られます Bedburg-Hau モイラント城を現代作家の美術館に、グリントン兄弟のコレクション」『芸樹新潮』（1997.8）、103頁。

・1998

三島憲一「ヨーゼフ・ボイス／ボイスあるいは精神の楽譜」（特集・20世紀美術の巨匠）『BT美術手帖』v.50, n.749（1998.1）、142-153頁。

・1999

市原研太郎「エンプティ・ガーデン展——パラダイスとしての庭園（from Exhibition.2）」『BT美術手帖』v.51, n.774（1999.8）、187-193頁。

ジェニファー・ヒッギー「ヨーゼフ・ボイス展（海外レポート・ロンドン）」『BT美術手帖』v.51, n.779（1999.11）、154-5頁。

小用隆志「ヨーゼフ・ボイスとアレゴリー」（第50回美学会全国大会発表要旨）『美学』199（1999冬）、50頁。

3. 展覧会カタログ

・個展

Exhibition of Joseph Beuys, 22 November - 11 December, 1982, Galerie Watari/organized by Shizuko Watari, Tokyo: Galerie Watari, 1982.

【ヨーゼフ・ボイス展】西武美術館、1984年 [6月2日-7月2日]

ゲッツ・アドリアーニ「ヨーゼフ・ボイス」千足伸行訳、9-17頁。

ナム・ジュン・パイク「ボイス—雑草・雑草」18-19頁。

ギュンター・ウルブリヒト「ボイスについてあれこれ」檜山哲彦訳、20-23頁。

ヨーゼフ・ボイス「わたしは場の特性をくまなく探究する」檜山哲彦訳、137頁。

森口陽「ボイスのアクション」140頁。

植松奎二「ヨーゼフ・ボイス インタビュー」141-144頁。[[『美術手帖』n. 527からの転載]

経歴, 作品歴 (西武美術館編) 157-159頁。

主要文献160-161頁。

【ウルブリヒト・コレクションを基とする展覧会。ボイス来日。】

【ヨーゼフ・ボイス マルティプル】西武百貨店 (ザ・コンテンポラリー・アートギャラリー)、1989年 [4月14日-5月17日]

中島徳博「ヨーゼフ・ボイス、あるいは知覚の拡張」ページ無 (見開き1頁)。

【ボイス+パイク展】ワタリウム、1984年

【ヨーゼフ・ボイス ポスター・コレクション 造形空間と政治空間】川崎市民ミュージアム (グラフィック・ギャラリー)、1991年 [3月20日-6月23日]

若江漢字「ヨーゼフ・ボイスとポスター」2-3頁。

吉見俊哉「創造力の資本、あるいは資本の創造力」4-5頁。

岡崎乾二郎「茸とコヨーテ」6-7頁。

三島憲一「矛盾を生き抜くこと ボイスから学ぶ」8-9頁。

略歴/参考文献。

【ヨーゼフ・ボイス 国境を越えユーラシアへ】ワタリウム、1991年 [9月21日-12月30日]

ヤロミール・イエドリンスキ「ポーレントランスポート1981」10-19頁。

池田裕行インタビュー/構成「ボイスをめぐる対話」:

1. 上田紀行「地球大のシャーマン」26-36頁。

2. 今泉吉晴「ウサギという不思議」46-52頁。

3. 松香光夫「ミツバチの熱と彫刻」60-62頁。

4. 針生一郎「<革命>のアクション」68-74頁。

ヤン・フート/バート・デ・パール「ヨーゼフ・ボイスの“経済の価値”」94-99頁。

ヤロミール・イエドリンスキ「ヨーゼフ・ボイスのドロ잉」100-104頁。

ヤロミール・イエドリンスキ「ヨーゼフ・ボイス 経歴」108-110頁。

【ヨーゼフ・ボイス】名古屋、アキライケダギャラリー、1993年 [6月7日-7月31日]

【リーフレット/図版 <Tisch mit Aggregat>、1958/85のみ】

『ヨーゼフ・ボイス展』フジテレビギャラリー、1993年 [6月29日-9月30日]

ヨーゼフ・ボイス「ステイトメンツ」木下哲夫訳、6-7頁。

キャロライン・ティスドール「ヨーゼフ・ボイス」木下哲夫訳、10-19頁。

水沢勉「みえない彫刻——ヨーゼフ・ボイスの現在」29-33頁。

山本和弘「ヨーゼフ・ボイス—自由・平等・博愛の芸術」39-45頁。

アンソニー・ドフェイ「ボイスの思い出」木下哲夫訳、119-121頁。

山本和弘編「ヨーゼフ・ボイス略歴」124-125頁。

『ヨーゼフ・ボイス マルチプル:博愛のヴィークル』フジテレビギャラリー、1994年 [8月22日-9月20日]

山本和弘「ヨーゼフ・ボイスのマルチプル 博愛のヴィークル」14-27頁。

水沢勉「永遠の黄色 ヨーゼフ・ボイスの〈カプリ・バッテリー〉をめぐって」29-33頁。

イェルク・シェルマン/ベルント・クリューザー「ヨーゼフ・ボイスへの質問」加藤淳/川尻竜彰訳、35-56頁。[原典:Fragen an Joseph Beuys. in; Joseph Beuys. Die Multiples, Köln-New York, Edition Schellmann, 1992]

山本和弘編「ヨーゼフ・ボイス略歴」195-199頁。

『ヨーゼフ・ボイス展 再生するアイデア/経済の価値』フジテレビギャラリー、1996年 [8月20日-9月21日]

加藤淳「序文——再生するアイデア (7頁) /経済の価値 (33頁)」

山本和弘「社会彫刻へのパルティトゥーア」8-15頁。

若江漢字「灰色の聖骸布」30-31頁。

クラウド・シュテック「ルーヴォス治療士とツヴィーバック (ラスク) のかけら」(抄録) 柳下敬子訳、34-35頁。

ヤン・フート「『経済の価値』について」(抄録) 柳下敬子訳、50-53頁。

・グループ展

『現代ドイツ美術展』東京国立近代美術館、1971年 [10月20日-12月5日] (京都近美:12/16-1/30)

ヴェルナー・シュレンマーバッハ「序」5-9頁。[〈櫛〉と〈フェルトスーツ〉出品。略歴あり]

『行為と創造=現代美術からの啓示』国際交流基金、1982年[ボイス展:11月27-28日]

ヨーゼフ・ボイス「メッセージ:ヨーゼフ・ボイスは訴える—変革への道」16-17頁。

キャロライン・ティスドール「ヨーゼフ・ボイス 日本の観衆のための序説・ボイスの活動について」31-36頁。

『ドイツ70年代グラフィック展』目黒区美術館、1988年 [4月2日-5月5日]

トルステン・ロディエク「70年代の美術」中島芳郎訳、6-13頁。

[ボイス/独語による年譜、個展歴、文献あり]

『世界の飢えを考えよう—国際芸術展』世田谷美術館、1990年 [7月7日-8月5日]
ジョン・ストリンガー「思想のための食糧」33-43頁。[世界巡回展。ボイス作品
図版 (7000本の櫛) 70頁。]

『ヨーゼフ・ボイスの世界—ドローイング・オブジェ・版画—』国立国際美術館、
1990年 [8月25日-9月24日]

ゲッツ・アドリアーニ「ヨーゼフ・ボイスについて」

トーマス・M・メッサー「グッゲンハイムのヨーゼフ・ボイス」

略歴/文献/展覧会歴

[Institute for Foreign Cultural Relations, Stuttgart (ed.), Joseph Beuys. Drawings
Objects and Printsに本文のみを翻訳したパンフレットを添付。]

『アイ・ラブ・アート』ワタリウム、1991年 [3月2日-5月19日]

バート・ウィンザー「環境虐殺とアート」5-10頁。

山本和弘「“青き影”へのプレリュージェイエン」35-36頁。

『ヨーゼフ・ボイス年譜』37頁。

『デュシャン、ケージ、ボイス&フルクサス』足利、M画廊、1992年 [4月10日-
5月9日]

三村栄介「ヨーゼフ・ボイス 略歴」ページ無。[限定100部/マルチプル
“Kitschpostkarte Nr. 1”付]

『冬のメルヘン 20世紀ドイツ美術の神話』栃木県立美術館 1993-4年 [12月12
日-2月6日]

山本和弘「冬のメルヘン—ヨーゼフ・ボイスを中心とした近代芸術〈モデルネク
ンスト〉を解釈する試み、あるいは未完の近代についての断章」10-39頁。

[レームブルク、マタレ、ボイス、ボイスシューラーの解説・略歴・展覧会歴あり]

『フルクサス』ワタリウム美術館、1994、5年 [11月29日、3月12日]

トーマス・ケライン「ジョークをつくっているんです!“議長”ジョージ・マチュ
ーナスの目から見たフルクサス」ワタリウム美術館訳、9-26頁。[バーゼル、クンス
トハレから巡回 (カタログ翻訳/ワタリウム美術館)]

『レボリューション/美術の60年代 ウォーホールからボイスまで』東京都現代美
術館、1995年 [9月30日-12月10日]

渡部葉子「境界を越える美術—ウォーホールからボイスまで」18-21頁。

『現代ドイツ美術—ボイス以降の若き作家たち』国立国際美術館、1995年 [12月
14日-1996年2月27日]

ウリ・ボーネン「NRW から、1990年代の新しいドイツ美術—様式の複数性と継続性—」10-11頁。

マルティン・エングラウ「ヨーゼフ・ボイス」(作家解説) 13-14頁。

〔東アジア巡回展共通カタログに日本語版パンフレットを添付〕。

『アクション 行為がアートになるとき 1949-1979』東京都現代美術館、1999年
[2月11日-4月11日]

ポール・シンメル「虚空への跳躍—パフォーマンスとオブジェ」岡村恵子訳、17-119頁。

『なぜ、これがアートなの?』水戸芸術館現代美術ギャラリー、98-99年 [12月19日-3月22日]

4. 関連文献

ローズリー・ゴールドバーグ『パフォーマンス 未来派から現在まで』中原佑介訳、リプロポート (アールヴィヴァン選書) 1982年 [ヨーゼフ・ボイス (第六章 ライヴ・アート=1933年ころからのアメリカおよびヨーロッパでのパフォーマンス) (149-151頁)] [Roselee Goldberg, Performance, live art 1909 to the present.]

谷川晃一『現代の美術とサブカルチャー』国文社 (ポリロゴス叢書)、1984年。
[[あとがき] 270-273頁]

伊東順二『現在美術』PARCO出版、1985年 [過去向きの未来 (II 現在美術 BERLIN) (127-160頁)]。

東京ドイツ文化センター『ドイツ年'84』、1986 [[ヨーゼフ・ボイス、ウルブリヒト・コレクション展] 270-275頁。]

中村敬治『現代美術/パラダイム・ロスト』書肆風の薔薇、1988年。

「ツァイトガイスト」展評 297-299頁 (初出『読売新聞』1982年12月8日夕刊)

「ヨーゼフ・ボイスの版画とポスター展」302-303頁 (初出『読売新聞』1983年4

月22日夕刊) 「兎について」453-455頁 (初出『新美術新聞』No. 382) 「ドクメ

ンタ8」181-190頁 (初出『美術手帖』1987年9月号)

セゾン美術館 (編)『新しいミュージオロジーを探る—西武美術館からセゾン美術館へ』リプロポート、1989年。

荻原佐和子「パフォーマンスとしての現代美術—ボイス、クリストを中心に」74-85頁。

中村麗「ヨーゼフ・ボイス東京滞在日誌より」81頁。

資料(会期、入場者数、ポスター図版) 241頁。

和多利志津子『アイラブアート——現代美術の旗手12人』日本放送出版協会、1989年。[2.ナム・ジュン・パイク——東は東、西は西(39-61頁)/3.ヨーゼフ・ボイス——うさぎの話(63-85頁)]

『現代美術 ウォーホル以後』美術出版社、1990年「ヨーゼフ・ボイス」(図版と文) 182-185頁。

秋田由利「ボイスのエコロジー」211-213頁。

『KANRANSHA 1980-1992』かんらん舎、1992年 [Joseph Beuys I: Nov. 17-Dec. 13, 1980 (7-8頁) / Joseph Beuys II: Jan. 19-Feb. 7, 1981 (9頁)]。

ジーン・シーゲル編『アートワーズ 現代美術の巨匠たち——90年代アートのために』木下哲夫訳、スカイドア、1992年。[ヨーゼフ・ボイス 行動と作品/インタビュー:アキレ・ボニト・オリヴァ] [Jeanne Seagel (ed.), Artwords 2 - discourse on the early 80s, Michigan, Ann Arbor/ UMI Univ., 1988]。

菅原教夫『やさしい美術 モダンとポストモダン』読売新聞社、1992年。[23.ボイスとコンセプチュアル・アート(Ⅲ.モダニズムの美術)(234-245頁)、再録]

——「ボイス、キーファー、そして殿敷侃。あるいは芸術と政治、芸術と経済」『殿敷侃展』図録、下関市立美術館、1993年。

山本和弘「イミ・クネーベル——秩序をもったカオス」『イミ・クネーベル——秩序をもったカオス』展図録、栃木県立美術館、1994年、5-9頁。

岡林洋『芸術のダブルキャラクター』勁草書房、1995年 [第五章 ボイスのマルチプル、アクション/第六章 芸術のダブルキャラクター——ボイスの「社会彫刻」と芸術の反トータリタリズム(123-181頁)]。

エドワード・ルーシー=スミス『20世紀美術家列伝』篠原資明他訳、岩波書店、1995年。[ヨーゼフ・ボイス(23.芸術作品ではなく芸術家)(360-364頁)] [Edward Lucie-Smith, Lives of the Twentieth Century Artists, London, George Weidenfeld & Nicholson Limited, 1986 (New ed; London, Thomas & Hudson, 1995)。

ゲルハルト・リヒターほか『ゲルハルト・リヒター 写真論/絵画論』清水穰訳、淡交社、1996年。[リヒターのノートとインタビューからのボイスへの言及箇所/110-2, 143-5頁]

アメリカ・アレナス『なぜ、これがアートなの?』福のり子訳、淡交社、1998年。
[第7章「物」は語る(150-170頁)]

「ボイス、ヨーゼフ」(項目)『世界の美術家 500』木下哲夫訳、美術出版社、1998年、43頁。

●外国文献

1. Books and Exhibition Catalogues

Otto Mauer, Beuys, Ausst.-Kat., Eindhoven, Stedelijk van Abbemuseum, 1968.

Helmut Rywelski, Einzelheiten—Joseph Beuys, Köln, 1970.

Heiner Bastian, Tod im Leben—Gedichte für Joseph Beuys, München, Carl Hanser, 1972.

Joseph Beuys, Zeichnungen 1947-1959 I— mit einem Gespräch zwischen Joseph Beuys und Hagen Lieberknecht, Köln, Schilmer, 1972.

Lothar Romain/ Rolf Wedewer, Über Beuys, Düsseldorf, Droste, 1972.

Franz Joseph van der Grinten / Hans van der Grinten, Joseph Beuys—Bleistiftzeichnungen aus den Jahren 1946-1964, Berlin, Propyläen, 1973.

Clara Bodenmann-Ritter, Joseph Beuys— Jeder Mensch ist ein Künstler— Gespräch auf der dokumenta 5 1972, Frankfurt a.M., Ulstein, 1975.

Franz Joseph van der Grinten / Hans van der Grinten, Joseph Beuys—Wasserfarben / Watercolors 1936-1963, Frankfurt a.M., Propyläen, 1975.

Volker Harlan / Rainer Rappmann / Peter Schata, Soziale Plastik—Materialien zu Joseph Beuys, Achberg, Achberger, 1976(2.Aufl., 1980).

Caroline Tisdall, Joseph Beuys—Coyote, Text und Photographie von Caroline Tisdall, München, Schilmer-Mosel, 1976(3.Aufl.1988).

Ingrid Burgbacher-Krupka, Prophete rechts, Prophete links—Joseph Beuys, Nürnberg, Edition für moderner Kunst im Belser Verlag, 1977.

Christos M. Jochimides, Joseph Beuys—Richtkräfte, Nationalgalerie Berlin, Staatliche Museen Preussischer Kulturbesitz, Berlin, 1977.

Germano Celant, Beuys—Tracce in Italia, mit Texten von Achille Bonito Oliva, Heiner Bastian, Caroline Tisdall u.a., Neapel, Edition Amelio, 1978.

Ingrid Burgbacher-Krupka, Strukturen zeitgenössischer Kunst—Eine empirische Untersuchung zur Rezeption der Werke von Beuys, Darboven, Flavin, Long, Walter, Stuttgart, 1979.

Axel Hinrich Murken, Joseph Beuys und die Medizin, Münster, Copenrath, 1979.

Caroline Tisdall (Hrsg.), Joseph Beuys, exh.cat., New York, Solomon. R. Guggenheim Museum / Thames and Hudson, 1979.

Heiner Bastian, Joseph Beuys: Kunst-Kapital, Gespräche sowie Texte und Materialien zu aktuellen Fragen, München, 1980.

Heiner Bastian, Joseph Beuys—Strassenbahnhaltestelle, Berlin, 1980.

Joseph Beuys—Zeige deine Wunde, 2 Bde., hrsg.von der Städtischen Galerie im Lenbachhaus, München, Bd.1; mit einem Text von Armin Zweite und Photographien von Ute Klophaus; Bd.2; Reaktionen auf den Ankauf des Environments durch das Lenbachhaus, München, Schellmann and Kluser; Städtische Galerie im Lenbachhaus, 1980.

Franz Joseph van der Grinten / Hans van der Grinten, Joseph Beuys - Ölfarben / Oilcolors 1936-1965, München, Prestel, 1981.

Theodora Vischer, Beuys und die Romantik, Köln, Walther König, 1981.

Lucrezia de Domizio / Buby Durini / Italo Tomassoni (Hrsg.), Incontro con Beuys. Bolognano (Pescara), 1984.

Franz Joseph van der Grinten / Friedhelm Mennekes, Menschenbild-Christusbild, Ausst.-Kat, Stuttgart, 1984.

Franz-Joachim Verspohl, Joseph Beuys—Das Kapital. Raum 1970-1977: Strategien zur Reaktivierung der Sinne; mit Fotos von Ute Klophaus (Reihe Kunststück 3906), Frankfurt a.M, Fischer Taschenbuch Verlag, 1984.

Armin Zweite, Joseph Beuys: Arbeiten aus Münchener Sammlungen, Ausst.-Kat., München, Schilmer/Mosel, Städtische Galerie im Lenbachhaus, 1981.

Heiner Bastian, Abschied von Joseph Beuys—Noch steht nichts geschrieben, Köln, 1986.

Heiner Bastian, Klaus Gallwitz [Hrsg.], Joseph Beuys—Blitzschlag mit Lichtschein auf Hirsch (Lightning with stag in its glare). 1958-1985, Bern, Benteli, 1986.

Joseph Beuys—Wilhelm-Lehmbruck-Preis 1986—Reden zur Verleihung des Wilhelm-Lehmbruck-Preises der Stadt Duisburg 1986 an Joseph Beuys, hrsg. vom Wilhelm-Lehmbruck-Museum der Stadt Duisburg, 1986.

Joseph Beuys zu seinem Tode—Nachrufe, Aufsätze, Reden, mit Beiträgen von Heinrich Böll, Klaus Staeck, Winfried Wiegand u.a., Bonn, Inter Nationes, 1986.

Jaqueline Burckhardt (Hrsg.), Ein Gespräch/Una discussione—Joseph Beuys, Jannis Kounellis, Enzo Cucchi, Anselm Kiefer—Gespräch in der Kunsthalle Basel am 28.-29.10.85, zwischen Joseph Beuys, Enzo Cucchi, Anselm Kiefer, Jannis Kounellis und Jean Christophe Ammann, Zürich, Parkett, 1986.

Volker Harlan, Was ist Kunst?—Werkstattgespräch mit Beuys, Stuttgart, Urachhaus, 1986. (5. Aufl., 1996)

Ute Klophaus, Sein und Bleiben—Photographie zu Joseph Beuys, mit Beiträgen von Laszlo Glozer und Margarethe Jochimsen, Bonn, Kunstverein, 1986.

Rhea Thönges-Stringaris, Letzter Raum. Joseph Beuys dernier espace avec introspecteur, Stuttgart, Verlag Freies Geistesleben, 1986.

Armin Zweite (Hrsg.), Beuys zu Ehren, Ausst.-Kat., Städtische Galerie im Lenbachhaus, München, 1986.

7 Vorträge zu Joseph Beuys 1986, hrsg. vom Museumverein Mönchengradbach, mit Beiträgen von Johannes Cladders, Heiner Bastian, Hans van der Grinten, Jonas Hafner, Johannes Stüttgen, Theodra Vischer, Armin Zweite, Mönchengradbach, 1986.

Joseph Beuys und die Fettecke—Eine Dokumentation zur Zerstörung der Fettecke in der Kunstakademie Düsseldorf, Heidelberg, Edition Staeck, 1987.

Wenzel Beuys, Blitzschlag mit Lichtschein auf Hirsch 1958-1985 von Joseph Beuys, Heidelberg, Edition Staeck, 1987.

Fernand Groener / Rose-Maria Kandler (Hrsg.), 7000 Eichen—Joseph Beuys, mit Beiträgen von Joseph Beuys, Richard Demarco, Johannes Stüttgen, Rhea Thönges-Stringaris u.a., Köln, Walther König, 1987.

Theo Altenberg / Oswald Oberhuber (Hrsg.), Gespräch mit Beuys: Joseph Beuys in Wien und on Friedrichshof, Hochschule für angewandte Kunst, Wien; Klagenfurt, Ritter, 1988.

Heiner Bastian, Joseph Beuys—Skulpturen und Objekte, Ausst.-Kat., München, Schilmer/Mosel, 1988.

Heiner Bastian (Hrsg.), Joseph Beuys—The secret block for a Secret Person in Ireland. Ausst.-Kat., München, Schilmer/Mosel, 1988.

Christel Raussmüller-Sauer (Hrsg.), Joseph Beuys und Das Kapital—4 Vorträge zum Verständnis von Joseph Beuys und seiner Rauminstallation >Das Kapital Raum 1970-1977< in den Hallen für neue Kunst, Schaffhausen, mit Texten von Joseph Beuys, Hans U. Bodenmann, Alois Martin Müller, Mario Kramer, Johannes Stüttgen, Schaffhausen, 1988.

Otto Gmelin/ Helene Sussure, Beuys, Hantschke, Klee— Demontage von Image und Vermarktung, Reutlingen, 1988.

John Francis Moffit, Occultism in Avantgarde Art—The Case of Joseph Beuys, Michigan; London; Ann Arbor, UMI Reserch Press, 1988.

Hiltrud Oman, Die Kunst auf dem Weg zum Leben—Beuys, mit einem Essay von Lukas Beckmann, Weinheim/Berlin, Quadriga-Verl., 1988. (1998 von der Autorin durchges. u. bearb. Taschenbuchausg. München, Heine, 1998 (Heine-Bücher;19, Heine-Sachbuch;610)

Joseph Beuys. Der Darmstädter Werkblock, hrsg. von der Kulturstiftung der Länder in Verbindung mit dem Hessischen Landesmuseum Darmstadt, mit Beiträgen von Sigrun Paas und Friedhelm Mannekes, Darmstadt, 1989.

Joseph Beuys. Frühe Aquarelle, mit einem Text von Werner Schade, München, Schilmer/Mosel, 1989.

Matthias Bleyl (Hrsg.), Joseph Beuys—Der erweiterte Kunstbegriff, Texte und Bilder zum Block-Beuys im Hessischen Landesmuseum Darmstadt, Darmstadt, Verl. der Georg Buchner Buchh., 1989.

Friedhelm Mennekes, Beuys zu Christus—Ein Position im Gespräch / Beuys on Christ—A Position in Dialogue, Stuttgart, 1989.

Eva, Wenzel und Jessyka Beuys, Joseph Beuys—Block Beuys (mit Farbaufnahmen von Claudio Abate im Hessischen Landesmuseum in Darmstadt), München, Schilmer-Mosel, 1990.

Carin Cuoni (ed.), Energy Plan for the Western Man. Joseph Beuys in America, Writings by and Interviews with the Artist., New York, Four Walls and Eight Windows Press, 1990.

Christa Lichtenstern, Wirkungsgeschichte der Metamorphosenlehre Goethes von Philipp Otto Runge bis Joseph Beuys, (Metamorphose in der Kunst des 19. und 20. Jahrhunderts, Bd.1), Weinheim, VCH, Acta humaniora, 1990.

Galerie der Stadt Kornwestheim / Barbara Strieder (Hrsg.), Joseph Beuys. Plastische Bilder 1947-1970, mit Textbeiträgen von Franz Joseph van der Grinten u.a., Ausst.-Kat., Stuttgart, Gerd Hatje, 1990.

Klaus Staeck/Gerhard Steidl (hrsg.u.foto.), Joseph Beuys: Das Wirtschaftswertprinzip, Heidelberg, Edition Staeck, 1990.

Joseph Beuys : Transit; Bd.1-3. Ausst.-Kat: Kaiser Wilhelm Museum Krefeld/Bonn, Bild-Kunst, 1991.

Bd.1: plastische Arbeiten 1947-1985; Texte, Sabine Roder; Gerhard Storck.

Bd.2: Zeichnungen 1947-1977; Text: Gerhard Storck.

Bd.3: Barraque d' dull odde, 1961-1967; Text: Gerhard Storck.

Volker Harlan / Dieter Koeplin / Rudolf Velhagen (Hrsg.), Joseph Beuys—Tagung, Basel 1.-4.Mai 1991, Basel, Wiese, 1991.

Mario Kramer, Joseph Beuys ; >Das Kapital Raum 1970-1977<, Heidelberg, Edition Staeck, 1991.

Brigitte Krenkers / Johannes Stuttgarten, Aktion Ost/West—Omnibus für direkte Demokratie in Deutschland, Wangen, FIU, 1991.

Mark Rosenthal, Joseph Beuys— Blitzschlag mit Lichtschein auf Hirsch, Museum für Moderne Kunst, Frankfurt.a.M., Schriften zur Sammlung, Frankfurt.a.M, 1991.

Heiner Stachelhaus, Joseph Beuys, Düsseldorf, ECON, 1991 (1.ed, Classen, 1987).

Theodora Vischer, Joseph Beuys. Die Einheit des Werkes— Zeichnungen, Aktionen, Plastische Arbeiten, Soziale Skulptur, Köln, Buchhandlung Walther König, 1991.

Armin Zweite (Hrsg.) , Joseph Beuys - Natur Materie Form, Ausst.-Kat., München, Schirmer-Mosel, 1991.

Ann Temkin/ Bernice Rose, Thinking is Form : the Drawings of Joseph Beuys, with a contribution by Dieter Koepplin, Exh.Cat., London, Thames & Hudson, 1993.

Gerhard Theewen, Joseph Beuys. Die Vitrinen Ein Verzeichnis, Köln, Walther König, 1993.

Joseph Beuys / Frans Haks, Das Museum— Ein Gespräch Über seine Aufgaben, Möglichkeiten, Dimensionen..., Wangen, FIU, 1993.

Franz Joseph van der Grinten, Franz Joseph van der Grinten zu Joseph Beuys, hrsg.v. Friedhelm Mennekes, Köln, Wienand, 1993.

Staatliche Museen Kassel, Neue Galerie: Joseph Beuys: Raum in der Neuen-Galerie. Staatliche Museen Kassel, Berlin, Kulturstiftung der Länder (PATRIMONIA 73), 1993.

Veit Loers / Pia Wittmann (Hrsg.) , Dokumenta-Arbeit, Ausst.-Kat., Kassel, Edition Cantz, 1993.

Götz Adriani / Winfried Konnerz / Karin Thomas, Joseph Beuys, Köln, M. DuMont, Neuaufl. 1994.

Joseph Beuys, exh.cat., Musée national d'art moderne / Center George Pompidou, Paris, 1994.

Joseph Beuys, Ausst.-Kat., Kunsthaus Zürich, 1994.

Lynne Cooke/ Karen Kerry (Ed.), Joseph Beuys. Arena—where would I have got if I had been intelligent!, New York, DIA Center for the Arts/Distributed Art Publishers, 1994.

Uwe M. Schneede, Joseph Beuys—Die Aktionen, Ostfildern-Ruit bei Stuttgart, Gerd Hatje, 1994.

Arbeitskreis Block Beuys, Darmstadt (Hrsg.), Vorträge zum Werk von Joseph Beuys, Bearb. Klaus Pohl/ Inge Lorenz, Darmstadt, Häusser, 1995.

Joseph Beuys, Sprechen über Deutschland. Rede, gehalten am 20. November 1985 in den Münchner Kammerspielen, Vorw.v. Jürgen Kolbe, Bearb.v. Rainer Rappmann, Wangen, FIU, 1995.

Holger Brülls, Kein Kreuz. Das Biederlicher Mahnmal für die Toten der Wertkrieg von Joseph Beuys (Schriftenreihe des Geschichtsvereins Meerbusch e.V. No.1), Meerbusch, Geschichtsverein Meerbusch, 1995.

Silvia Gauss, Joseph Beuys. Gesamtkunstwerk Freie und Hansastadt Hamburg 1983/84, Wangen, FIU, 1995.

Inge Lorenz, Der Blick zurück. Joseph Beuys und das Wesen der Kunst. zur Genese des Werks und der Bildform (Theorie der Gegenwartskunst 4), Münster, Lit, 1995.

Förderverein "Museum Schloss Moyland e.V." (Hrsg.), Joseph Beuys am Niederrhein. Eine Wegleite, Kranenburg, 1995.

David Thistlewood (ed.), Joseph Beuys: Diverging Critiques (Critical Forum Series, vol.2), Liverpool, Liverpool University Press and Tate Gallery Liverpool, 1995.

Wolfgang Zumdick, Über das Denken bei Joseph Beuys und Rudolf Steiner, Basel, Wiese, 1995.

Frank Gieseke / Albert Markert, Flieger, Filz und Vaterland. Eine erweiterte Beuys Bibliographie, Berlin, Elefanten Press, 1996.

Heiner Bastian (Hrsg.), Joseph Beuys. The secret block for a secret person in Ireland: Sammlung Marx im Hamburger Bahnhof, Museum für Gegenwart-Berlin, Katalogbearb.v. Céline Bastian, München, Schilmer/Mosel, 1996.

Matthias Bunge, Zwischen Intuition und Ratio. Pole des bildnerischen Denkens bei Kandinsky, Klee und Beuys, Stuttgart, Steiner, 1996.

Förderverein "Museum Schloss Moyland e.V." (Hrsg.), Joseph-Beuys-Symposium: Kranenburg 1995, Red.: Inge Lorenz/ Barbara Strieder, Basel, Wiese, 1996.

Georg Jappe, Beuys Packen. Dokumente 1968-1996 (Statement-Reihe; S20), Regensburg, Lindinger+Schmid, 1996.

Mario Kramer, Klang & Skulptur: der Musikalische Aspekt im Werk von Joseph Beuys, Darmstadt, Häusser, 1996.

Friedhelm Mennekes, Joseph Beuys; Christus denken / Thinking Christ, Köln, Kathorisches Bibelwerk, 1996.

Lothar Schilmer (Vorw.u.hrsg.); Alain Borer (Einf.), Joseph Beuys. Eine Werkübersicht: Zeichnungen und Aquaele, Drucksachen und Multiples, Skulpturen und Objekte, Räume und Aktionen 1945-1985, München, Schilmer / Mosel, 1996. (Engl.ed; Alain Borer / edited by Lothar Schirmer, The essential Joseph Beuys, London, Thames and Hudson, 1996.)

Klaus Staeck (Hrsg.), "Mit dummen Fragen fängst die Revoltion an". Die Sammlung Staeck, Göttingen, Steidl, 1996.

Carl-Peter Buschkuhle, Wärmezeit: zur Kunst als Kunstpädagogik bei Joseph Beuys, Frankfurt a.M. (u.a.), Peter Lang, 1997.

Harald Szeemann (Hrsg.), Beuysnobiscum. Eine kleine Enzyklopädie (Fundus-Bücher 147), Beitr.v. Laura Arici / Marc Boelen / Antje von Graevenitz u.a., Amsterdam, Verlag der Kunst, 1997.

Hessischen Landesmuseum Darmstadt, Graphische Sammlung 11, Joseph Beuys. "Joseph Beuys verlängert im Auftrag von James Joyce den Ulysses um sechs weitere Kapitel", undatiert, 6 Hefte; 24.7.1997-28.9.1997., Ausst-Kat., 1997.

Jörg Schellmann (ed.), Joseph Beuys. the multiples: catalogue raisonné of multiples and prints, Busch-Reisinger Museum, Harvard University Art Museum Cambridge / Walker Art Center, Minneapolis., Munich; New York, Ed.Schellmann (-8.ed / first full English.), 1997.

Lucrezia De Domizio Durini, *The felt hat: Joseph Beuys a Life Told*, (Charta Risk 3), Milan, Edizioni Charta, 1997.

Sabine Fabo, *Joyce und Beuys—ein intermedialer Dialog* (Reihe Siegen 134; Medienwissenschaft), Heidelberg, Winter, 1997.

Stiftung Museum Schloss Moyland ; Museum Katharinenhof Kranenburg, *Joseph Beuys "Gräberfeld" 1957-58: das keramische Relief von Joseph Beuys im Deutschen Bundestag, dokumentarischer Katalog zur Ausstellung im Museum Katharinenhof Kranenburg, Bedburg-Hau, Stiftung Museum Schloss Moyland u.a.*, 1997.

Sybille K. Lunau, *Kunst zwischen Pathologie und Erlösung—zur Anwendung und Erweiterung der Kunst bei Franz Rosenzweig und Joseph Beuys* (Theorie der Gegenwartskunst 8), Münster, Lit, 1997.

Monika Angerbauer-Rau, *Beuys-Kompass. Eine Lexikon zu den Gesprächen von Joseph Beuys*, Köln, DuMont, 1998.

Lynne Cooke; Karen Kelly (Ed.). *With essays by Ann Temkin, Drawings after the Codices Madrid of Leonard da Vinci/Joseph Beuys*, New York, Dia Center for the Arts, 1998. [Dt.Ausg.u.d.T:Zeichnungen zu den beiden 1965 wiederentdeckten Skizzenbüchern "Codices Madrid" von Leonard da Vinci/Joseph Beuys (Übers. Wolfgang Himmelberg; Benjamin Schwarz), Düsseldorf, Richter, 1998.]

Hans Markus Horst, *Kreuz und Christus. Die religiöse Botschaft im Werk von Joseph Beuys*, Stuttgart, Kathorisches Bibelwerk, 1998.

Dirk Lucklow, *Joseph Beuys und die amerikanische Anti Form-Kunst*, Berlin, Gebr.Mann, 1998.

Bethi Blaser, *Der autonome Künstler. zur Künstlerexistenz von Mercurius Weisenstein und Joseph Beuys* (Schriften zur Ethnopschoanalyse; 2), Frankfurt a.M., Brandes und Apsel, 1999.

Jürgen Geisenberger, *Joseph Beuys und die Musik*, Marburg, Tectum Verlag, 1999.

Nationalgalerie Berlin, *Das XX. Jahrhundert— Ein Jahrhundert Kunst in Deutschland, Ausst.-Kat.*, Berlin, 1999.

[*"Die Gewalt der Kunst"* (Altes Museum), *"Geist und Materie"* (Neue Natio-

nalgarelie), "Collage—Montage" (Hamburger Bahnhof) ; 4. Sep. 1999-9. Jan.2000]

2. PERIODICALS

"Krawall in Aachen-Interview mit Joseph Beuys", *Kunst*, 4/4, Okt./Nov. 1964, S.95ff. (Dasselbe in; *Aachener Prisma*, 1, 1964).

Willoughby Scharp, "An Interview with Joseph Beuys", *Artforum* 8(Dec.), 1969, pp.40-47.

Ursula Meyer, "How to Explain Pictures to a Dead Hare", *Art News*, 68(Jan.), 1970, pp.470-472.

Alastair McKintosh, "Beuys in Edinburgh", *Art and Artists* 5(Nov.), 1970, p.10.

John Anthony Thwaites, "The Ambiguity of Joseph Beuys", *Art and Artist* 6(Nov.), 1971, pp.22-23.

Alastair McKintosh, "Proteus in Düsseldorf", *Art and Artist* 6(Nov.), 1971, pp.24-27.

Achille Bonito Oliva, "Partitura di Joseph Beuys: la rivoluzione siamo noi", *Domus* 505(Dec.), 1971, pp.48-50.

C.Belz, "Joseph Beuys' American Debut", *Art in America*, (Sep.), 1972, pp.102-103.

Linda Morris, "The Beuys Affair: Calender of Events", *Studio International* 184(Dec.), 1972, p.226.

"Joseph Beuys-Erwin Heerich-Klaus Staeck, Aufruf", *Kunstjahrbuch* 2, Hannover, 1972, S.122f.

Hainer Stacherhaus, "Phänomenon Beuys", *Magazin Kunst*, 13.Jg, n. 50, 1973, S. 29-46.

Walter Robinson, "Beuys: art engagé", *Art in America* 62(Nov.-Dec.), 1974, pp.76-79.

Heinrich Hahne, "Zum neuen Beuys-Prozess: Versuch einer Kategorialanalyse",

Kunstwerk 29 (Mär.), 1976, S.36-37.

Caroline Tisdall, "Jimmy Boyle, Joseph Beuys: A Dialogue", *Studio International* (Mar.), 1976, pp.144-145.

"Joseph Beuys", *Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft*. hrsg.von H.Lützeler, Bonn, 1977 (Sonderdruck) .

Margarete Jochimsen, "Eine Holzkiste von Joseph Beuys konfrontiert mit Erwin Panofskys Grundsätzen zur Beschreibung und Inhaltsdeutung von Werken der bildenden Kunst", *Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft* 22, 1977, S.148-155.

Rolf Wedner, "Hirsch und Elch im zeichnerischen Werk von Joseph Beuys", *Pantheon* 35 (Jan.-Mär.), 1977, S.51-58.

Annelie Pohlen, "Interview mit Joseph Beuys", *Heute Kunst* XXII (Feb./Apr.), 1978, S.18f.

Brooks Adams, "Landscape Drawings of Joseph Beuys", *Print Collector's Newsletter* 10 (Nov.-Dec.), 1979, pp.148-153.

Joseph Beuys, "Museum des Geldes", mit einem Text von Sarenco, *Factotum-book* 12, Calone-baone, 1979.

Horst Schwebel, "Gespräch mit Joseph Beuys", in: *Glaubwürdig-Fünf Gespräche Über heutige Kunst und Religion mit Joseph Beuys*, Heinrich Böll, Herbert Falken, Kurt Marti, Dieter Wellershoff, München, Kaiser, 1979.

Benjamin H.D.Buchloh, "Beuys—The Twilight of the Idol", *Artforum* 18 (Jan.), 1980, pp.35-43.

Irmeline Lebeer, "Joseph Beuys", *Cahiers du Musée National d'Art Moderne* 4 (Apl.-Jun.), 1980, pp.170-193.

Donald B.Kuspid, "Beuys: Fat, Felt and Alchemy", *Art in America* 68 (May), 1980, pp.79-88.

Paul-Albert Plouffe, "Joseph Beuys: Avers et Revers", *Parachute* 21 (Winter), 1980, pp.32-41.

Richard Demarco, "Conversations with Artists", *Studio International* 195 (Sep.), 1982, pp.46-47.

Richard Flood, "Wagner's Head", *Artforum* 21 (Sep.), 1982, pp.68-70.

"Joseph Beuys", Numero monografico dedicato a Joseph Beuys, Segunda Epoca, n.6, 1986.

Franz-Joachim Verspol, "Joseph Beuys — das ist erst einmal dieser Hut", *Kritische Berichte*, Jg.14, Heft 4, 1986, S.77-87 (Wiederabdruckt in: *NOEMA Art Magazine* 17, 1988, S.39-43).

"Spécial Joseph Beuys", *Artstudio* 4, 1987.

S.Germer, "Haacke, Broodthaers, Beuys", *OCTOBER* 1988, iss 45, pp 63-75

Eric Michaud, "The Ends of Art According to Beuys", *OCTOBER* 1988, iss 45, pp 36-46.

Thierry de Duve, "Joseph Beuys or the last of the Proletarians", *OCTOBER* 1988, iss 45, pp.47-62.

Johannes Rau, "Ansprache anlässlich der Eröffnung einer Ausstellung von Werken von Joseph Beuys in Berlin", *SINN UND FORM* 1988, v.40, n.3, S.644-647.

Lothar Romain, "Franz Marc und Joseph Beuys: Zur Wiederkehr des Romantischen in der deutschen Moderne", in: *Romantik und Gegenwart. Festschrift für Jens-Christian Jensen*, Köln, 1988, S.197-208.

Harald Szeemann, "Anschwebende plastische Ladung-vor-Isolationsgestell", *NOEMA Art Magazine* 17, 1988, S.30-35.

Jill Lloyd, "German sculpture since Beuys", *Art International* 6 (Spr.), 1989, pp.8-16.

Charles Stephens, "I see the Land of Macbeth: Joseph Beuys and Scotland (1970-1986)", *Variant* 6, 1989, pp.8-11.

Dieter Koeplin, "Zur Sammlung Hans und Franz van der Grinten aus der Beuys-Perspektive", in: *Liber amicorum Hans van der Grinten* (zum 60.

Geburtstag), Nijmegen, 1989.

Franz-Joachim Verspol, " >Mit offenen Augen schläft der Hase...< – Joseph Beuys und die Tiere", in: UNI-Report, Berichte aus der Forschung der Universität Dortmund 12 (Winter), 90/91, S.26-30.

David LeviStrauss, " American Beuys. I like America and America likes me (Critical Reception of the Artist)", ART CRITICISM 1993, v. 8, iss 1, pp 1-12.

Gerhard Büttner, "Wenn Dinge geschichten erzählen. Religionsunterricht in einer 7.Klasse mit Kunstwerken von Joseph Beuys", Religion Heute, 1995, n.22, S.126-129.

Rita Fischer, "J.BeuyS in der Grundschule (Kunsterziehung)", Grundschulunterricht, 1995, j.42, n.3, S. 68-70.

Annie Suquet, "Archaic thought and ritual in the work of Joseph Beuys", Res- (Cambridge,-Mass.), 1995, n.28, Autumn, p.148-162.

Regine Prange, " 'Damit die Kunst mehr umfaßt als sie je umfaßt hat'. Joseph-Beuys-Symposium, Kranenburg, 29. 9.-3.10.1995.", Kunstchronik. Monatsschrift für Kunstwissenschaft, Museumswesen und Denkmalpflege, 1996, j.49, n.8, S.356-362.

Mark Rosenthal, "Le dialogue de Joseph Beuys avec la geometrie a l'ecart du minimalisme americain", Revue de l'art. centre national de la recherche scientifique, 1996, n.113, p.74-86.

Alexander Braun, "Wir haben das Recht, es so zu handeln, wie wir es für furchtbar halten" (Interview zu Gebrüder van der Grinten), Kunstforum-International, 1997-98, n.139, S.433-441.

Stefan Fricke, "Musikalisches bei Beuys", Neue Zeitschrift für Musik, 1997, j.158, n.3, S.26-32.

J.C.Gardes, "l'esprit du romantisme dans l'art allemand contemporain: quelques reflexions autour de l'oeuvre de Joseph Beuys", Allemand d'aujourd'hui. Politique, economie, societe, culture, 1997, n.s., n.142, p.136-151.

Sabine Fabo, " Parallelprozess Literature: Joseph Beuys' Zeichnungen zum Ulysses", Kunstforum-International, 1998, n.140, Apr. / Jun., S.84-95.

**“Steiner. Beuys. Belyj. Kunz - Richtkräfte für das 21. Jahrhundert: Kunsthaus
Zürich, vom 21.5.1999-1.8.1999”, Vernissage: Die Zeitschrift zur Ausstellung,
1999/7, n.13, S.3-56.**

ヨーゼフ・ボイス年譜 (1921-1986)

(三本松 倫代・編)

1921年

- ・5月12日 ヨーゼフ・ハインリヒ・ボイス (Josef Heinrich Beuys)、酪農協同組合幹部の父ヨーゼフ・ヤーコプ・ボイスと妻ヨハンナ・マリア・マルガレーテ (旧姓ヒュルザーマン) の長男 (一人息子) としてクレーフェルトに生まれる。同年秋に一家はオランダとの国境に近いライン河下流地域 (Niederrhein) のクレーフェに移転するが、同地の景観と歴史を愛していたボイスは61年の展覧会カタログから出生地をクレーフェと書いている。また、名前の表記法は1963年頃自ら現在の Joseph Beuys に改めたが、直筆のサインには e にアクセントを記している。

1938年 (17歳)

- ・ヒトラー・ユーゲントとしてニュルンベルク行進に参加。ボイスはこうした活動の根拠を主に両親の厳格なカトリック的教育への反抗に帰している。両親との仲は余り良好でなく、アビトゥーア落第時にはサーカス団に同行して一年の放浪の後連れ戻されている。
- ・この頃の文化的志向はゲーテ、シラーやノヴァーリス、キルケゴール、ハムスン、サティやワグナーなど。美術ではムンクを気に入っていたが、クレーフェのギムナジウム在学中に彫刻家アーヒレス・モアトガートのアトリエをしばしば訪れる。また、ナチスにより校庭での焚書対象となっていた彫刻家ヴィルヘルム・レームブルックの作品図版を見て、彫刻に対する最初の直観を得る。

1940年 (19歳)

- ・アビトゥーア獲得後、小児科医を志していたが招集により中断。自然科学や工学への興味から空軍を志願し、ポーゼンとエアフルトで通信兵として訓練を受ける。ポーゼンでは後に動物映画の監督となるハインツ・ズィールマンやカッセル大学の美学、哲学的人間学の教授となるヘルマン・ウルリヒ・アーゼミセンらと交流を持つ。

1941年 (20歳)

- ・ケーニヒグレッツで急降下爆撃機の訓練。休暇中にヴァイマルのニーチェ・アルヒーフを訪れる。
- ・友人のフリッツ・ロルフ・ローテンベルク (43年に強制収容所で死亡) を通じてルドルフ・シュタイナーの人智学思想を知る。

1942年 (21歳)

- ・南イタリア、ウクライナ、クロアチア、クリミア半島に急降下爆撃機搭乗無線士

として配属され、スラブ地方の大陸風景に影響を受ける。

1944年 (23歳)

- ・クリミア上空でロシアの迎撃作戦に遭遇、ドイツ陣地内に帰還するが吹雪の中計器の故障により墜落する。操縦士は死亡するが、重傷を負い意識を失っていたボイスは移動中のタタール人に救出され、ドイツ軍の捜索隊に発見されるまでの8日間体に脂肪を塗りフェルトで包むという治療を受ける。

1945年 (24歳)

- ・回復後も各地に配属され、2月には落下傘部隊として北オランダ、北海沿岸に駐留。従軍中の計5回に及ぶ激しい負傷により終戦直前には傷痕徽章が贈られる。終戦時にはイギリス軍の捕虜としてクックスハーフェンに収容されていた。
- ・8月5日 クレーフェの両親の家に戻った後、彫刻家への志望を固めクレーフェの彫刻家ヴァルター・ブリュクス、画家ハンス・ラーマースらと交流を持つ。

1946年 (25歳)

- ・4月 デュッセルドルフ美術アカデミーに入学。ヨーゼフ・エンゼリング (彫刻科) の下で学ぶ。

1947年 (26歳)

- ・49年までハインツ・ズィールマンとゲオルグ・シマンスキーの動物学の映画撮影を手伝う。
- ・冬学期よりエーヴァルト・マタレーのクラスに転向。ボイスは手仕事の技術、素材への感覚を重視するマタレーに良く応えていた。

1948年 (27歳)

- ・マタレーによるケルン大聖堂南扉のレリーフ製作に参加し、中心的役割を担う。
- ・ゲーテの自然科学やシュタイナー思想に興味を持つ。

1950年 (29歳)

- ・ギムナジウムの教師のもとで後にコレクターとなるファン・デア・グリーンテン兄弟 [ハンス (21歳) とフランツ・ヨーゼフ (17歳)] と出会う。
- ・総合的芸術家、或いは社会変革者の先達としてレオナルドとガリレイに傾倒。また、ジョイスの作品に影響を受け、58年頃からドロウイングによる『ユリシーズ』の「増章」を行う。

1951年 (30歳)

- ・マタレーのマイスターシューラーとして教育を終了し、アカデミー内にエルヴィン・ヘーリヒと共同でアトリエを得る。個人の注文制作を請け、また様々

なコンクールに応募するが結果は捗々しくなかったボイスの経済的苦境を、ファン・デア・グリンテン兄弟が画家ヘルマン・トイバーの勧めに従ってお小遣いで作品を購入することで援助する。最初の個人注文はフリッツ・ニーハウスによる墓石の制作（ビューダーリヒの墓地に設置）。

- ・ 8月 ドルナッハのゲーテアヌムを訪ねる。

1952年 (31歳)

- ・デュッセルドルフでの「鋼と鉄」展で<ピエタ>が賞を受ける。
- ・シュタイナーの講演集『蜜蜂について』（1923年）から独自の彫刻理論、熱理論を発展させ、作品に蜜蝋や脂肪を用い始める。

1953年 (32歳)

- ・ 2月22日-3月15日 クラーネンブルクのファン・デア・グリンテン家で85点の彫刻、クロッキー、版画からなる最初の個展「ヨーゼフ・ボイス 素描、木版、立体作品」。後に47点に縮小されてヴッパータルのフォン・デア・ハイト美術館でも展示される（3月22日-4月27日；ヴォルフガング・トレーガーとの二人展）。
- ・ 3月末日をもってデュッセルドルフ美術アカデミーから退籍。

1954年 (33歳)

- ・ 1958年までデュッセルドルフ＝ヘルトにアトリエを借りる。

1955-57年 (34-36歳)

- ・ 前年末の婚約解消、戦時中の肉体疲労等から2年間鬱状態に陥る。57年の春から秋にかけてファン・デア・グリンテン家の農場に滞在し、農作業等を手伝いながら自己の精神的、芸術的再形成を図る。
- ・ 1957年 アウシュヴィッツ＝ビルケナウの強制収容所追悼碑コンペに参加。

1958年 (37歳)

- ・ クレーフェの動物園協の古い保養所にアトリエとして数室を借りる。戦争で破壊されたビューダーリヒの教会記念碑を製作。
- ・ 5月 父ヨーゼフ・ヤーコプ死去。動物学者の娘で、デュッセルドルフで美術教師をしていたエーファ・ヴルムバハと知り合う。

1959年 (38歳)

- ・ 9月19日 エーファと結婚。翌年秋にデュッセルドルフのオーバーカッセル、ドラーケプラッツ4に自宅兼アトリエを構える。

1961年 (40歳)

- ・ デュッセルドルフ美術アカデミーの教授（公共彫刻科）に就任。
- ・ 10月8日-11月5日 クレーフェ、ハウス・ケックケック美術館でのファン・

デア・グリンテン・コレクションによる水彩、油彩、素描、立体的平面作品(Plastische Bilder；「オブジェ」の語を避けたボイスの造語)の展覧会で、初めてのカタログが刊行される(テキストはボイスとファン・デア・グリンテン兄弟が執筆)。

- ・12月 息子ヴェンツェル誕生。

1962年 (41歳)

- ・デュッセルドルフでナム=ジュン・パイクと出会い、米軍のデザイナーとして滞独中のジョージ・マチューナスをヴィースバーデンに訪ねる。同年ヴィースバーデンでのフルクサス・フェスティバルに参加する予定だったが都合により欠席し、翌63年に最初のアクションを行う。ボイス自身は62年の出会いを自らのフルクサス活動の始まりとしている。

1963年 (42歳)

- ・2月2-3日 デュッセルドルフ美術アカデミーでの「フルクサス・フェスティバル」(Festum Fluxorum.Fluxus)で最初のアクション<フルクサス、シベリア交響曲第一楽章>(2日)と<二人の演奏家のためのコンポジション>(3日)を行う。
- ・3月11日 パイク展のオープニングで<ピアノ・アクション>を行う(ヴッパータル、パルナス画廊)
- ・7月18日 ハプニングについてのアラン・カプローの講演で、初めて脂肪を使ってアクション(タイトル不明)を行う(ケルン、ルドルフ・ツヴィルナー画廊)
- ・9月14日 ヴォルフ・フォステルのハプニング<9ナイン デコラ/ジェン>(9 Nein De Coll/Agen)に<フルクサス 睡眠ピース カードピース>で参加(ヴッパータル、パルナス画廊)
- ・10月11日 コンラート・ルーク(フィッシャー)、ジグマー・ポルケ、ゲルハルト・リヒターのグループ展「ポップな生活—資本主義的リアリズムへのデモンストレーション」(デュッセルドルフ、ベルゲス家具店)にゲスト参加。
- ・10月26日-11月24日 ファン・デア・グリンテン家の元家畜小屋にて同兄弟のコレクション展「ヨーゼフ・ボイス フルクサス」を開催。62年以前に制作の多くの作品に<フルクサス>のタイトルが冠されている。

1964年 (43歳)

- ・6月27日-10月5日 ドクメンタ3に1951-56年の素描と4つの彫刻〔<蜂の女王>I-III(1952)と<S&FG-S&UG>(1953)]を発表
- ・7月20日 アーヘン工科大学での「新芸術フェスティバル」(Festival der neuen Kunst-Actions/Agit-Pop/De-Collage/Happenings/Events/Antiart/L'Autrisme/Art Total/Refluxus)にアクション<クーカイ、アコペーナイン!茶色の十字架、脂肪角、モデル脂肪角>で参加するが、激昂した

観客によってアクションは中止、ボイスは学生の一人に殴られる。この時のプログラムに作品的要素の強い〈経歴／作品歴〉を発表。

- ・ 8月30日 ヴォルフ・フォステルによるハプニング〈バス・ストップ〉にアクション〈首長 フルクサスの歌〉で参加（コペンハーゲン、シャーロットンブルク城）
- ・ 11月 娘イエシカ誕生。
- ・ 12月1日 アクション〈首長—フルクサスの歌〉（ベルリン、ルネ・ブロック画廊）予定ではロバート・モリスがニューヨークで同時にパフォーマンスを行うことになっていたが、モリスは8時間という上演時間を本気にせず何もしなかったことが後にブロックの質問によって判明。
- ・ 12月11日 アクション〈マルセル・デュシャンの沈黙は過大評価されている〉（フルクサス・デモンストレーション）デュッセルドルフ、ZDFのスタジオからTV生放送。共演ヴォルフ・フォステル、パーツオン・ブロック。

1965年（44歳）

- ・ 6月5日 ハプニング〈24時間〉をパーツオン・ブロック、シャーロット・ムーアマン、ナム＝ジュン・パイク、エカート・ラーン、トマス・シュミット、ヴォルフ・フォステルと発表（ヴッパータル、パルナス画廊、0-24時）ボイスはアクション〈そして我々の中で...我々の下で...大地の下に〉を行う。
- ・ 11月26日 デュッセルドルフ、シュメーラ画廊での「...何らかの綱...」展（11月27日-12月31日）のオープニングとしてアクション〈死んだウサギに絵を説明するには〉を行う。
- ・ 最初のマルチプル〈死から死へ—その他の短編〉発表。リヒャルト・シャウカルの短編集に鉛筆ドローイングをつけたもの。

1966年（45歳）

- ・ 6月17-24日 素描展「...茶色の十字架と共に」ベルリン、ルネ・ブロック画廊
- ・ 7月28日 アクション〈グランドピアノのための均質浸透、現代の最も偉大な作曲家はサリドマイド児だ〉をデュッセルドルフ美術アカデミーのナム＝ジュン・パイクとシャーロット・ムーアマンのコンサート会場で発表。
- ・ 9月9日 ニューヨーク、セントラルパークでの「第4回ニューヨーク前衛フェスティバル」でシャーロット・ムーアマンが〈チェロのための均質浸透〉（ボイス作曲の〈チェロ・ソナタ〉—フェルトで覆われたチェロに赤い十字架を貼りつけるという「無音の楽曲」）を上演。
- ・ 10月 コペンハーゲンの101画廊でアクション〈フェルトTV〉（14日）と〈ユーラシア：シベリア交響曲第34楽章〉を行う（15日）。
- ・ 10月31日 ベルリンのルネ・ブロック画廊でアクション〈ユーラシア：シベリア交響曲第32楽章〉（“34”の冒頭を省いたバージョン）を再演。
- ・ 11月4-23日 版画用キャビネットに収められた「素描」展（ウィーン、ネヒスト・ザンクト・シュテファン画廊）

- ・12月15日 アクション<マンレーサ>をデュッセルドルフのシュメーラ画廊で行う(共演ヘニング・クリスティアンゼン、ビョルン・ネールガルト)。改装の為閉鎖される旧画廊に捧げられた。

1967年(46歳)

- ・3月20日 アクション<本流>を「脂肪空間」展(3月21-28日)のオープニングで行う(ダルムシュタット、フランツ・ダーレム画廊)。共演クリスティアンゼン。
- ・6月22日 デュッセルドルフ美術アカデミーで自分の学生らと「ドイツ学生党」(Deutschen Studentenpartei)を結成。
- ・7月2日 アクション<ユーラシアの杖 82分のフルクサス・オルガヌム>ウィーン、ネヒスト・ザンクト・シュテファン画廊。共演ヘニング・クリスティアンゼン。
- ・9月13日-10月29日 メンヒェングラートバハ市立美術館にて最初の大規模な回顧展「ボイス」。この時の作品が“アン・ブロック”(ひとかたまり)としてウエラ会長カール・シュトレアに一括購入され、後にシュトレア・コレクションとして巡回展の後ダルムシュタットに「ブロック=ボイス」として設置される。また、この時のコンセプト「並行過程」(Parallelprozess)が、68年に年間を通じて活動に用いられる。
- ・ボイスの政治性を危惧する州文化省に対し、教授会からの書簡でアカデミー校長エデュアルト・トリーアはボイスの創造・教育能力を高く評価し、留任を強く要請する。
- ・11月30日 アクション<öö-プログラム>デュッセルドルフ美術アカデミーの入学歓迎会。
- ・ケルンのアート・インターメディア画廊で1947-66年の素描展(会期不明)

1968年(47歳)

- ・2月9日 アントワープのワイド・ホワイト・スペース画廊での「素描と脂肪彫刻」展(2月10日-3月5日/並行過程2)のオープニングとしてアクション<ユーラシアの杖 82分のフルクサス・オルガヌム>を再演。共演ヘニング・クリスティアンゼン。
- ・3月23日-5月5日 「絵画、彫刻、素描」展(並行過程3)(アイントホーヴェ、ファン・アッペ市立美術館)。メンヒェングラートバハからの巡回展。
- ・6月15日-8月9日 「シュトレア・コレクション」展(ミュンヘン、ハウス・デア・クンスト)
- ・6月20日 カールスルーエ造形美術大学で講演。
- ・6月27日-10月6日 ドクメンタ4にシュトレア・コレクションから20点以上の作品を展示した「ボイス・ルーム(10×12m)」を発表(並行過程4)。
- ・7月20日-9月5日 「空間563×491×563、脂肪角と引き離された空気ポンプ」展(ニュルンベルク、キュンストラーハウス)
- ・8月24日-10月6日 「シュトレア・コレクション」展(ハンブルク、芸術

協会)

- ・ 9月20-29日 ケルンのアートフェアの商業性に抗議する「概観'68」展(デュッセルドルフ、クンストハレ)に参加。
- ・ 10月14日 ケルンのアート・インターメディア画廊でアクション<真空・量塊>(Vakuum・Masse, simultan = Eisenkiste, halbiertes Kreuz, Inhalt 100kg Fett, 100 Luftpumpen) とくユーラシアの杖>からのフィルム上映(20分)。
- ・ 11月24日 デュッセルドルフ美術アカデミーの教授9人がボイスに対して不信声明を採択。
- ・ 12月5日 アナトール・ハーツフェルトによる戯曲<'鋼机'/ハンドアクション(角アクション)>上演。共演ヨアヒム・ダクヴィッツ、ウルリヒ・マイスター、ヨハネス・シュトゥットゲン(デュッセルドルフ、クリームチーズ)
- ・ 12月10日 「ドイツ学生党」を「フルクサス・ツォーネ・ヴェスト」に改称。
- ・ 12月13日 アート・インターメディア画廊での「素描、オブジェ」展(12月14日-1月22日:1969年2月15日まで延長)のオープニングで講演とディスカッションを行う。

1969年(48歳)

- ・ 1月21日 ブラウンシュヴァイク造形美術大学で、一日講師としてスタジオトーク。
- ・ 1月29日-2月21日 「基礎Ⅲ」展(デュッセルドルフ、シュメーラ画廊)
- ・ 2月27日 ルネ・ブロック画廊(ベルリン)での「封鎖'69」展(パレルモ、ポルケ、パナマレンコら9人によるリレー展;2月28日-3月26日)のオープニングに際してベルリンのアカデミー・デア・キュンステで行われたアクション<私は君を釈放する>(Ich versuche dich freizulassen (machen))、観客の暴動で中断終了。この時後に秘書となるハイナー・バステリアンと知り合う。
- ・ 3月1日-4月14日 「シュトレアー・コレクション」展(ベルリン、新国立美術館)
- ・ 3月27日 フルクサス・コンサート<..または我々はそれを変えるべきか?>(ヨーゼフ・ボイス:ピアノ、ヘニング・クリスティアンゼン:バイオリン)(メンヒェングラートバハ市立美術館)
- ・ 3月30日-4月27日 ハラルド・ゼーマンによる企画展「態度が形態となるとき」(ベルン、クンストハレ)に<熟彫刻>を発表。
- ・ 4月25日-6月8日 「シュトレアー・コレクション」展(デュッセルドルフ、クンストハレ)
- ・ 5月7日 ボイスから教室の提供を受けてヨルク・イメンドルフが実施していた「国際労働週間リドル・アカデミー」でのアクションと討論会(5月5-10日)に対し、アカデミー校長トリーアが警察に通報。ノルトライン＝ヴェストファーレン州の学術研究省により22日までアカデミーが閉鎖される。

- ・5月29-30日 フランクフルトのパフォーマンス・フェスティバル「エクスペリメンタ3」(ドイツ舞台芸術アカデミー、5月29日-6月7日)にてアクション<ティトゥス/イフィゲーニエ>(Titus/Iphigenie von Joseph Beuys, Johann Wolfgang Goethe, Claus Peymann, Wilhelm Shakespeare und Wolfgang Wiens)を行う。
- ・6月5日-8月31日 ファン・デア・グリンテンとシュトレアのコレクションによる「素描と彫刻」展(バーゼル美術館)
- ・6月15日-7月13日 グループ展「デュッセルドルフ・シーン」(ルツェルン美術館)でインスタレーション<ルツェルンの脂肪空間>を発表。
- ・9月30日-10月12日 「概観69」展(デュッセルドルフ)に<弾む足、過疎的足>を発表。
- ・10月4日 マウリツィオ・カーゲル制作のベートーヴェン生誕200周年記念番組「ルートヴィヒ・ヴァン、ベートーヴェンへのオマージュ」(WDR)の撮影で、ロベール・フィリウやディーター・ロートらと共にセットを手がけ、一部番組内でアクションを行う。(70年6月1日放映)
- ・11月16日-70年1月11日 「シュトレア・コレクション」展(バーゼル美術館)

1970年(49歳)

- ・1月 ケルンのアート・インターメディア画廊でのグループ展「複数の背景II」で、初めて独自の意匠で(棺職人に)作らせたヴィトリネを自作品の展示に使用。前面のみガラスが嵌め込まれ、2体目から木箱が白く塗られた脚の細いこのタイプは以後「ホワイト・ボックス」と呼ばれる。
- ・1月24日-2月22日 ハンブルベーク、ルイジアナ美術館でのグループ展「タバネルナコロ」にキルケビー、ロング、ネールガルトらと参加。当初より作品内でのアクションを映像化する意向でインスタレーション<シベリア横断鉄道>(1961)を展示、オーレ・ジョンの撮影によるフィルムをマルチプル<シベリア横断鉄道>(1961-70)として発表。
- ・3月2日 「フルクサス・ツォーネ・ヴェスト」を「非有権者組織自由国民投票」に改称。デュッセルドルフ、アンドレアス通り25番地に情報センターを開設する。
- ・4月1日 ドルトムントのアム・オストヴァル美術館でアンドレ・マッソン展のオープニングにヴィリ・プラント首相と対談。
- ・4月24日 ポップ・アートを主とする他の作品群と「カール・シュトレア・コレクション」展のツアーを終えた<ブロック=ボイス>がダルムシュタットのヘッセン州立博物館/美術館に設置される。ただしボイスは84年まで度々自分で作品・配置等を変えている。
- ・6月6日-7月4日 「ファン・デア・グリンテン・コレクションによるヨーゼフ・ボイスの素描」展(オランダ、ミデルブルフ市庁舎の畜殺場)
- ・7月30日-8月30日 「ファン・デア・グリンテン・コレクションによる素描1945-68」展(オランダ、フローニンゲン美術館)
- ・8月23日-9月12日 グループ展「戦略」(Strategy: get arts, Contemporary

Art from Düsseldorf) (エディンバラ、エディンバラ芸術大学) の会場でヘニング・クリスティアンゼンとアクション〈ケルティック (キンロッホランノッホ)、スコットランド交響曲〉を10回行う (23-30日)。その他にインスタレーション〈群れ〉(1969)と〈アリーナ〉 (1971-72) の原形となる100点の写真パネルを出品。

- ・ 9月15日 ルネ・ブロック画廊での「フルクサス・フェスティバル」でシャーロット・ムーアマンが〈チェロのための均質浸透〉を再演。
- ・ 10月12日 ケルン、クンストハレでの第4回アートフェア会場でアクション〈我々はアートフェアに足を踏み入れる〉 (共演クラウス・シュテーク、H.P. アルファーマン、ヴォルフ・フォステル、ヘルムート・リヴェルスキー)
- ・ 10月18日-11月15日 「素描1946-1962」展 (ウルム、芸術協会)。以下ブラウンシュヴァイク (ヘアツォーク=アントン=ウルリヒ美術館、12月11日-71年1月31日)、キール (クンストハレ、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン芸術協会、1971年3月7日-4月11日) を巡回。
- ・ 10月30日 アクション〈金曜日のオブジェ 'la 焼かれた魚の骨'〉 (デュッセルドルフ、ダニエル・シュポーリ・イート・アート画廊)
- ・ 11月6日-12月6日 「ファン・デア・グリンテン・コレクション」展 (インスブルック、タクシスパレス画廊、1971年1月5-30日; ウィーン、ネヒスト・ザンクト・シュテファン画廊)
- ・ 11月24日 テリー・フォックスとのアクション〈死んだネズミのアクション/ 隔離ユニット〉 (デュッセルドルフ美術アカデミー)

1971年 (50歳)

- ・ 1月 デュッセルドルフの古いメッセ会場に自由アカデミーと国際コミュニケーションセンターの設立を計画する。
- ・ 1月16日-2月28日 「アクション アクション」展 (ストックホルム、近代美術館) ヨスト・ヘルビヒとファン・デア・グリンテンのコレクションからボイス自身が作品選択、会場・カタログ構成を行う。
- ・ 2月2日-3月末 ミュンヘンのシェルマン&クリューザー画廊で「マルティプル」展。
- ・ 2月10日 エルヴィン・ヘーリヒ、クラウス・シュテークの2名とケルン・アートフェアの閉鎖性に対して示威行動を起こす。ボイスの宣言文による「呼びかけ」に多くの美術関係者が署名した。
- ・ 3月20日-4月25日 「ファン・デア・グリンテン・コレクションによる素描とオブジェ」展 (ヴッパータル、フォン・デア・ハイト美術館)
- ・ 4月5日 アクション〈ケルティック+〜〜〉 (パーゼル、ザンクト・ヤコブ・スタジアムの市民避難所)。共演ヘニング・クリスティアンゼン。
- ・ 6月1日 デュッセルドルフ、アンドレアス通り25番地に「国民投票による直接民主制のための組織 (自由市民運動協会)」設立
- ・ 6月5日 劇〈誰がいまなお政党に興味をよせているだろうか?〉 (ボイス教室の留学生ロコ・トゴとの朗読) (フランクフルト、「エクスペリメンタ4」、

5月26日-6月6日)

- ・ 6月5日-7月31日 「素描と小彫刻 (ルッツ・シルマー・コレクションによる)」展 (ザンクト・ガレン、芸術協会)
- ・ 6月18日 ケルンの街頭で「国民投票による直接民主制のための組織 (自由市民運動協会)」の説明図の入った10,000枚の買物袋を配付するアクション<現実的芸術—ホーエシュトラーセ、ケルン> (協力:アート・インターメディア画廊)
- ・ 7-8月 アカデミーに入学できなかった志望者142名を自分のクラスに入れる。
- ・ 8月 オステンデ近郊ゾイデゼー湖周辺で<湿原のアクション>。
- ・ 8月17日-9月5日 インスタレーション「私は私の山々を見たい (Voglio vedere i miei montagne)」展 (アイントホーヴェ、市立ファン・アッペ美術館) タイトルはイタリアの画家ジョヴァンニ・セガンティーニの言葉。
- ・ 9月6-7日 ヘーリヒ、シュテークと「国際自由美術市場」設立に関する会議をハイデルベルクで行う。(10月6日にデュッセルドルフ美術アカデミーで第2回会議)
- ・ 9月17日-10月2日 デュッセルドルフのシュメーラ画廊の改築オープンに際してインスタレーション<バラック・ドウドウル・オッデ>と<ビデオドッペル> (2台のモニターでアクション<ケルティック+〜〜〜>の録画を上映) を発表。
- ・ 10月5-30日 「素描とオブジェ」展 (ケルン、アート・インターメディア画廊)
- ・ 10月15日 ボイスが入れた入学志願者への申請却下に対して、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の学術研究省大臣ヨハネス・ラウとの直接交渉を求めてアカデミーの事務所を16名の志願者と共に占拠。18日に入学許可の決定通知の後、21日に入学許可証書を受諾する。
- ・ 11月1日 「自由大学のための委員会」設置。
- ・ 11月13日 イタリアでの最初の個展「ヨーゼフ・ボイスの作業の主題 (ヨーロッパ社会の政治的問題) 1946-1971 (シルマー・コレクション)」(ナポリ、ルチオ・アメリオ-モダン・アート・エージェンシー) のオープニングとして講演「政治的アクション:自由民主的社會主義:国民投票による組織」。以後、年4-5回の割合でギャラリストのルチオ・アメリオのカプリヤベスカーラの家滞りし、討論やマルチプルの制作を行う。
- ・ 11月16日-12月15日 「素描、水彩、グアッシュ」展 (ミュンヘン、トーマス画廊)
- ・ 12月14日 デュッセルドルフのテニスコート用地拡大に伴う森林伐採に抗議するアクション<ついに政党独裁政治に打ち勝つ> (デュッセルドルフ、グラフェンベルクの森)
- ・ 12月15日 カイザー・ヴィルヘルム美術館 (クレーフェルト) への<バラック・ドウドウル・オッデ>設置に際してのアクション<芸術=人間>。言説によるアクションと呼べる域に達したという講演。

1972年 (51歳)

- ・ 1月19日 アクション<芸術=人間。自由民主的社會主義>(ヴルフ・ヘルツォーゲンラートとの討論) (エッセン、フォルクヴァンク美術館)
- ・ 2月24日-3月6日 フィルムとビデオを上映した「ヨーゼフ・ボイス 7つの展覧会」展 (ロンドン、テート・ギャラリー)
- ・ 2月26-27日 アクション<インフォメーション・アクション> (ロンドン、テートギャラリー [26日] とホワイトチャペル画廊 [27日])。
- ・ 3月31日 ヨナス・ハフナーによる聖金曜日のアクション<平和の祝典>に参加 (メンヒェングラートバハ大聖堂前)
- ・ 4月21日 批評家のアキレ・ボニト・オリヴァ主催のフォーラム、オルタナティヴ・インフォメーション・センター (ローマ) で講演・討論会「私達が革命だ (自由民主的社會主義)」
- ・ 5月1日 アクション<清掃>。メーデーのパレードの間、学生2名と歩道を掃除し、集めたゴミをヴィトリーネに収めてルネ・ブロック画廊に展示した。(西ベルリン、カール・マルクス広場)
- ・ 5月12日-6月17日 「素描1949-1969」展 (デュッセルドルフ、シュメーラ画廊)
- ・ 5月19日 デュッセルドルフ美術アカデミーでシンポジウム (「創造性のための自由学校」) 開催と「自由大学のための委員会」設立。出席者はボイスの他ヨハネス・クラッダース、エルヴィン・ヘーリヒ、アルフレッド・シュメーラ、ハンス・ファン・デア・グリント、ヴィリ・ボンガート。
- ・ 6月10日-7月1日 ポストンで「マルティプル」展 (ハーカス・クラカウ画廊)。アメリカで最初の個展。(グループ展は70年MOMAの「インフォメーション」)
- ・ 6月10日-10月1日 「1951-70年の彫刻と素描」展 (ミュンヘン、州立近代美術館)
- ・ 6月11日-10月1日 ヴェネツィア・ビエンナーレのビデオアート・セクションで<フェルトTV>上映
- ・ 6月15日 ナポリでの「アリーナ——私が聡明であったなら辿り着いたであろう場所！」展のオープニングにアクション<人参木、汚れなき子羊> (Vitex Agnus Castus) を行う (ルチオ・アメリオ-モダン・アート・エージェンシー)
- ・ 6月30日-10月8日 ドクメンタ5に「国民投票による直接民主制のための組織」の案内事務所を設置。100日間の会期中観衆に説明と討論を行う。最終日には事務所閉鎖の「お別れアクション」としてアブラハム・クリスチャン・モーブスとボクシング試合を行った。
- ・ 6月30日-8月20日 「シュトレアー・コレクションによる素描とその他の平面作品」展 (ダルムシュタット、ヘッセン州立博物館/美術館)
- ・ 8月28日 デュッセルドルフ美術アカデミーへの志望者の入学許可制限の問題を巡ってボイスと学術研究省の間で話し合いが始まる。
- ・ 10月10日 ボイスと54名の入学志願者がアカデミーの事務局を占拠。翌11日、

ラウはボイスに解雇を通告する。これに対し学生達は3日間の授業ボイコットやハンガーストライキ等で抗議。また、リヒターらアカデミー教師9名の他に欧米各地の美術家・美術関係者が学術研究省に抗議文を提出した。

- ・ 10月30日 ローマのアッティコ画廊での「アリーナ」展(10月31日-11月20日) オープニング・アクション<アナヒャルシス・クローツ>

1973年 (52歳)

- ・ 1月13日-2月16日 「ドローイング1947-1972」展 (ニューヨーク、ロナルド・フェルドマン画廊; ミネアポリス、デイトン画廊、3月2-31日)
- ・ 2月10日 - 3月3日 「コレクティッド・エディションズ」展 (ニューヨーク、ジョン・ギブソン画廊)
- ・ 3月20日 ミラノ、ステュディオ・マルコーニでの「アリーナ」展。オープニングイベントはなし。
- ・ 3月28日-5月26日 「コレクティッド・エディションズ 1965-1972」展 (フランクフルト、レーア画廊)
- ・ 3月30日-5月13日 C.M.ヨアヒミデスとH.R.レビーンによる企画展「政治的闘争における芸術」に、ドクメンタ5の拡大版事務所(「自由大学」の資料を追加)の設置で参加。(ハノーバー、芸術協会)
- ・ 4月10日-5月19日 「マルチプル、本、カタログ」展 (ボン、クライン画廊)
- ・ 4月27日 デュッセルドルフの自宅内に「創造性と学際的研究のための自由国際大学協会」設立。
- ・ 6月29日-7月26日 「マルチプル」展 (カールスルーエ、グラフィックマイヤー画廊)
- ・ 8月9-13日 ミキス・テオドラキスらとアハベルク国際文化センターの会議に出席。「第三の道」の確立を提言する。
- ・ 8月20日 エディンバラのリチャード・デマルコ画廊にてアクション<正午から真夜中まで、12時間の講義>
- ・ 10月20日 自宅とデュッセルドルフ美術アカデミーの間に流れるライン河を丸木舟でアカデミー側へ渡るアクション。22日にはアカデミーの20番教室で学生と討論会を催し、ボイスのマイスターシューラー、アナトール・ハーツフェルトがボイスの復帰を宣言した。
- ・ 10月27日-12月2日 「カール・シュトレア・コレクションによる素描」展 (チュービンゲン、クンストハレ)
- ・ 11月1日 - 12月2日 「グラフィック、オブジェ、ドキュメント」展 (チューリヒ、工芸美術館)

1974年 (53歳)

- ・ 1月5-24日 「コレクティッド・エディションズII」展 (ニューヨーク、ジョン・ギブソン画廊)
- ・ 1月9-19日 ギャラリスト、ロナルド・フェルドマンの招聘により始めてアメ

- リカを訪問。講演（ニューヨーク、ミネアポリス、シカゴ）とアクション
＜デリンジャー＞（シカゴ、映画館“バイオグラフ”前、14日）を行う。
- ・ 2月8日 ハノーバーでの社会変革に関する会議で「経済領域の芸術」と題する
講演をし、シュタイナーの社会概念を示唆。
- ・ 2月20日 ハイน์リヒ・ベル、ゲオルク・マイスターマン、ヴィリ・ボンガー
ド、クラウス・シュテークと「創造性と学際的探求のための自由国際大学」
設立。
- ・ 2月28日 ボンで講演「社会組織—芸術作品」
- ・ 3月13日-4月15日 フランスで最初の個展「シュベック・コレクション1948-
1972、マルティプル、本、カタログ」（パリ、パマ画廊）。5月にボルドー
のフルーヴ図書館へ巡回。
- ・ 4月 ボイス所有の1936-72年の素描327点からなる最大のドローイングブロッ
ク「アイルランドの秘密の人物のための秘密のブロック」が、オクスフォード
近代美術館（4月7日-5月12日）に始まりエディンバラ国立近代美術
館（6月6-30日）、ロンドン現代芸術研究所（7月9日-9月1日）、ダブ
リン市立美術館（9月25日-10月27日）、ベルファストのアーツ・カウン
シル・ギャラリー（11月6-30日）を巡回。後に456点に補完されマルク
ス・コレクションに収められる。
- ・ 4月13-22日 家族とユーゴスラビアを旅行し、18日にベルグラードの学生文
化センターで講演を行う。
- ・ 5月19日-6月30日 カイザー・ヴィルヘルム美術館所蔵の200余点による「素
描1946-1971」展（クレーフェルト、ハウス・ランゲ美術館）
- ・ 5月23-25日 アクション＜私はアメリカが好き、アメリカは私が好き＞（ニュー
ヨーク、ルネ・ブロック画廊）。画廊の中で3日間野生のコヨーテと過ご
す。
- ・ バーゼル・アートフェアにロナルド・フェルドマン画廊がインスタレーション
＜炉床＞（1968-1974）を出展。
- ・ 6月5日 エディンバラ、リチャード・デマルコ画廊での「フォレスト・ヒルの
ボイス」展（6月6-29日）オープニング・アクション＜三つの壺のアク
ション＞（エディンバラ、フォレスト・ヒルの旧貧民院）
- ・ 8月 母ヨハンナ死去。
- ・ 8月19日 ギャラリストのリチャード・デマルコがエディンバラで開催した「石
油会議」（8月18-25日）でスコットランド沿岸における石油開発の影響
について語る。
- ・ 10月1日 ナポリのルチオ・アメリオ-モダン・アート・エージェンシーで「イ
タリアでの軌跡」展。以後アメリオとボイスのコラボレーションが諸都市
で同タイトルの下に発表される。
- ・ 10月30日-11月24日 C.M.ヨアヒミデスとノーマン・ローゼンタールの企画
展「芸術は社会に、社会は芸術に—ドイツの7アーティスト」（ロンドン、
現代芸術研究所）にダイアグラムを描きこんだ100枚の黒板のインスタ
レーション＜新しい社会へのエネルギーの方向—復元力＞を発表。11月

- 1日にはアルブレヒト・Dと会場で即興のコンサートを行う。
- ・秋 65年に発見されたレオナルドのスケッチブック「マドリッド手稿」公開に合わせ、同作品をテーマとする106点の素描集を制作。
- ・11月-74年2月 <アリーナ>をボニト・オリヴァの企画展「コンテンポラネア」(ローマ、ボルゲーゼ公園地下駐車場)で展示。100点のパネルは79年のグッゲンハイム展では3つの塊に集積した彫刻と化する。
- ・74-75年の冬学期 ハンブルク造形美術大学で客員教授として指導にあたる。

1975年 (54歳)

- ・クリスマスに写真家チャールズ・ウィルブとケニアに滞在。砂浜に描いた素描を写真に収める。
- ・2月1-26日 「コレクティッド・エディションズⅢ」展(ニューヨーク、ジョン・ギブソン画廊)
- ・2月5日- 「リトグラフと木版画」(ミュンヘン、シェルマン&クリューザー画廊)
- ・2月20日 カッセルの連邦労働裁判所が州労働裁判所の解雇を有効とする判決を棄却。
- ・4月5日-5月10日 ニューヨークで「炉床 I」展(ロナルド・フェルドマン画廊)と「<復元力> '74」(ルネ・ブロック画廊)を同時開催。
- ・4月12日-5月19日 「ボイスのドキュメンテーション」展(マーストリヒト、ボネファンテン美術館/リンブルク美術館)この頃から、70年代の展覧会では殆ど講演が行われる。
- ・4月20日・5月18日 「シュベック・コレクション、マルチプル、本、カタログ」展(カッセル、芸術協会)
- ・5月23日-6月29日 「素描、絵画、彫刻、オブジェ、アクションの写真」展(フライブルク芸術協会)
- ・5月24日-7月13日 ゼーマンとベルギーの左派雑誌“Pour”のイシ・フィッツマンらによる企画展「是/非—今日の美術」に<根底Ⅳ/4>を発表(ブリュッセル、王立美術館)
- ・5月末 心筋梗塞を起こし、3カ月間リハビリテーションを行う。
- ・夏 アハベルク国際夏期大学(INKA)に参加。
- ・10月15日 ブリュッセルで「芸術はいかに政治的か?」というテーマで講演。
- ・12月2日 州労働裁判所が和解を勧め、ボイスとデュッセルドルフ美術アカデミーは共に「1.ボイスは学生の入学申請/許可に関して干渉しないという条件で76年の夏学期より教員として復帰する 2.アカデミーはボイスの復帰の是非に関して教員全員にアンケートを実施する」という案を提出する。
- ・12月19日-76年2月8日 シュトレアとシュメーラ画廊の所蔵作品による「素描」展(ハノーヴァー、ケストナー協会)

1976年 (55歳)

- ・カッセルに開館した新美術館に4つの初期ヴィトリーネ作品や<群れ>を含むへ

ルビヒ夫妻のボイスコレクションが貸与され、ボイス自身による場所選択・設置の「ボイス室」が形成される。

- ・ 1月14日 ミュンヘンでボイスとシュテークのイニシアティブにより約30名の作家・批評家が参加した、ペンクラブをモデルとするIKG(国際美術家委員会)設立。
- ・ 1月30日 デュッセルドルフ地方労働裁判所は1973年3月28日公布の州学術研究省のボイス解雇通告を正当化。ボイスは上告を表明。
- ・ 2月12日-3月6日 シェルマン&クリューザー画廊の企画によるインスタレーション<君の傷を示せ>を、ミュンヘンの地下横断道の展示スペースに設置。市立美術館による作品購入に市民が抗議し、美術館、作家と市民の対話(結果購入)へと発展する。
- ・ 3月22日-4月10日 「ビッツ&ピース」展(ロンドン、ジェネラティブ・アートギャラリー)
- ・ 5月 連邦議会への立候補を決意。
- ・ 5月8日 ハリファックスのノヴァ・スコシア美術大学から名誉博士号を受ける。
- ・ 5月15日-6月15日 カリフォルニア大学アート・ギャラリーで「例証 ヨーゼフ・ボイス、マルティプル、素描、ビデオテープ」展
- ・ 7月18日-10月10日 第37回ヴェネツィア・ビエンナーレに<市電停車場、1961-1996—未来へのモニュメント>を発表。
- ・ 9月 <バラック・ドウドウル・オッデ>を含むラウフス夫妻のボイスコレクションが寄託され、カイザー・ヴィルヘルム美術館に2つのボイス室が形成される。
- ・ 9月1-30日 「絵画、彫刻」展(ウィーン、クレヴァン画廊)
- ・ 11月4-30日 リトグラフによる地図作品「<軌跡II>と<5つのリトグラフ>」展(ミュンヘン、シェルマン&クリューザー画廊)
- ・ 11月5日-77年1月2日 ボイス教室の学生、OB作家とボイスの作品を集めた「共に一隣に—向かいに」展(フランクフルト芸術協会)
- ・ 11月21日-77年1月9日 「個々の作品と関連性—10の新収蔵作品と1952-1974年の作品」展(クレーフェルト、ハウス・ランゲ美術館)
- ・ 12月15日 バーゼルでの国際美術家協会で講演「芸術家と国家」

1977年(56歳)

- ・ クラウス・シュテークが東ドイツ在住の弟ロルフを訪ねた際に持ち帰った東独の商品デザインに興味を持ち、大量の日用品、包装紙をロルフから取り寄せる。これらに「1経済の価値」という独自の「単位」と署名を記入し、一部はマルティプルとなる。70年代後半より「資本」は重要タームとなり、これらの3年間の集大成が<経済の価値>(1980)となる。
- ・ 2月24-5日 フランクフルトでのドイツ芸術家連盟のコロキウムで報告「概念の拡大」。
- ・ 2月26日-4月24日 ハンブルベークのルイジアナ美術館で「21人のドイツアーティスト」展に水彩画と<グランドピアノヨム>を発表。

- ・ 3月4日 ハンブルク市よりリヒトヴァルク賞を受賞し、5-6日の2日間にわたりハンブルクの芸術協会で討論会と講演を行う。
- ・ 3月15日 ベルリンのルネ・ブロック画廊で、画廊の中庭にジャガイモを植えるアクション<ジャガイモ栽培>。81年に道具や植物、土をヴィトリーネに収めた<ジャガイモ収穫>を同画廊で発表。
- ・ 3月16日 <復元力>(1974-77)がベルリンの国立美術館に設置される。
- ・ 4月16日-6月26日 「アイルランドの秘密の人物のための秘密のブロック」展 (パーゼル美術館)
- ・ 6月24日-10月2日 ドクメンタ6にインスタレーション<作業場の蜂蜜ポンプ>と<創造性と学際的研究のための自由国際大学協会>を設置し、会期中100日間にわたり観衆に説明と討論を行う。初日にアメリカへの衛星中継でマニフェストを発表。また、オランジェリーでは素描が展示される。
- ・ 7月3日-11月13日 ミュンスター彫刻プロジェクトのために脂肪彫刻<獣脂>(Unschlitt/Tallow)を制作。ミュンスターの地下通路に型を取ったボイスの彫刻で最大の作品だが、会期中に脂肪の冷却が完了しなかった。
- ・ 7月30日-8月8日 FIUのゲストとしてドクメンタ会場で開催されたアハベルク年次大会でかつての学生運動の指導者ルディ・ドゥチュケと討論、共にエルンスト・ブロッホを評価。
- ・ 10月5日-12月11日 「素描、水彩、コラージュ、絵画」展 (ゲント現代美術館、「ユーロパリア '77」)
- ・ 10月13日-11月20日 「素描」展 (ミュンヘン、シェルマン&クリューザー画廊)
- ・ 10月 ウルブリヒト・コレクションによる「ヨーゼフ・ボイス—マルティプル化された芸術」展が各地を巡回。(ボン州立美術館/ボン芸術協会、10月14日-11月20日; ブラウンシュヴァイク芸術協会、78年1月20日-2月26日; エッセン、フォルクヴァンク美術館、4月7日-5月15日; ストックホルム文化会館、8月31日-10月17日; グラーツ、ヨアネウム州立美術館、11月9日-12月3日)
- ・ 11月 イタリア、ジェノアとポローニャで個展。

1978年 (57歳)

- ・ 1月14日 クレーフェルト市よりトーン=ブリッカー栄誉メダルの表彰を受ける。
- ・ 1月 パーゼル美術館で<炉床II>を展示。<炉床I>(1975)に、パーゼル美術館の作品購入に76年の謝肉祭パレードで抗議した市民達が身に着けていたボイス風フェルトスーツと銅の杖を加えたもの。
- ・ 1月27日-2月25日 「グラフィック、マルティプル」展 (プレーメン、小グラフィックギャラリー)
- ・ 3月23日 「すべての人間は芸術家である」というテーマでINKA講演。
- ・ 4月7日 カッセルの連邦労働裁判所はノルトライン=ヴェストファーレン州学術研究省によるボイスの教授解雇通告を違法と判決。
- ・ 4月 「彫刻とオブジェ」展 (プレーマーハーフェン芸術協会、4月23日-5月

21日;マールブルク大学美術館、10月29日-12月3日;ゲッティンゲン
芸術協会、79年3月4日-4月8日)

- ・5月6日 ベルリンのアカデミー・デア・キュンステの正会員(造形芸術部門)に任命される。
- ・7月7日 ルネ・ブロック画廊の「フルクサス・ソワレ」として、デュッセルドルフ美術アカデミーでパイクトのピアノ・デュエット<ジョージ・マチューナスを偲んで>を行う。5月にボストンで逝去したマチューナスを追悼し、収益を遺族に贈った。
- ・11月30日-12月4日 1979年夏学期に新設予定のウィーン工芸大学の教授職(造形理論)招聘に対する協議のためウィーンに滞在。
- ・11月18日-79年2月4日 「貨幣の美術館—芸術・社会・生活における貨幣の奇妙な性質について」展(デュッセルドルフ、州立クンストハレ/芸術協会)に<貨幣に関する31の黒板>を発表。2月2日に市民大学でのシンポジウム「貨幣の奇妙な性質について」に参加。
- ・11月23日 ヨハネス・ラウの後任の学術研究省大臣ライムート・ヨヒムゼンが和解策として美術アカデミーのアトリエと教授の称号の継続使用許可と教育任務の削除を提示。ボイスはこれを受けて告訴を取り下げ、翌79年2月16日にウィーンからの招聘を辞退。
- ・12月23日 同日付「フランクフルター・ルントシャウ」紙に声明文「オルタナティヴへの呼びかけ」を発表。

1979年(58歳)

- ・1月21日-2月18日 「マタレーと彼の学生たち ボイス、ヘーゼ、ヘーリヒ、マイスターマン」展(ベルリン、アカデミー・デア・キュンステ)
- ・2月27日-3月10日 「ヨーゼフ・ボイス—芸術は、それでも人が笑うとき」展(ウィーン、ネヒスト・ザンクト・シュテファン画廊)。<基底空間 湿った洗濯物>はグラフィック・視覚芸術国際ビエンナーレ(ウィーン、分離派館/市立公園;6月23日-7月22日)に一部変えて出品された。
- ・3月10日 フランクフルトで緑の党(Die Grünen)の設立集会に参加、6月10日には同党から欧州議会に立候補する。その後も各地の党大会に参加(1980年1月11-12日;カールスルーエ、2月16日;ヴェーゼル、3月22-23日;ザールブリュッケン)。
- ・4月22日-6月17日 「イタリアでの軌跡」展(ルツェルン美術館)
- ・5月18日 デュッセルドルフのデニーズ・ルネ/ハンス・マイヤー画廊で新作展中のアンディ・ウォーホルと初めて会う。
- ・9月8日-11月4日 ゴスラル市芸術賞の受賞(9月9日)に際しての「素描とオブジェ」展(ゴスラル、近代美術館)
- ・10月3日-12月9日 第15回サンパウロ・ビエンナーレに円形フェルトの<ブラジルの基礎(基礎V)>を発表。
- ・11月 「素描」展(ロッテルダム、ボイマンス美術館、11月1日-80年1月15日;ベルリン国立美術館、2月21日-4月20日;ビーレフェルト・クンス

- トハレ、5月29日-7月20日；ボン学術センター、8月21日-9月28日)
- ・ 11月2日-80年1月2日 ニューヨークのグッゲンハイム美術館で大規模な回顧展「ヨーゼフ・ボイス」が開催される。
 - ・ 11月3日-12月31日 インスタレーション「ベルリン発：コヨーテからのニュース」(ニューヨーク、ロナルド・フェルドマン画廊)
 - ・ 11月7日-12月5日 経済誌『キャピタル』の「美術家ランキング100名」(ヴェリ・ボンガード選出)による最上位3名の展覧会「芸術=資本 ヨーゼフ・ボイス、ロバート・ラウシェンバーグ、アンディ・ウォーホル」(デュッセルドルフ、デニース・ルネ/ハンス・マイヤー画廊)

1980年 (59歳)

- ・ 1月24日-3月4日 「新作オブジェ」展 (ミュンヘン、シエルマン&クリューザー画廊)
- ・ 4月17日 『キャピタル』誌の招聘によりヨハネス・グロース、カール・ゲルストナーと「貨幣廃止」というテーマで鼎談を行う (ハノーパー、見本市会場)。
- ・ 6月1日-9月28日 第39回ヴェネツィア・ビエンナーレに「資本空間 1970-1977」を展示。この時ウォーホルはボイスの肖像画 (ルチオ・アメリオ画廊での4月「アンディ・ウォーホルによるヨーゼフ・ボイス」展で発表。二人も再会) を出品している。
- ・ 6月21日-8月31日 ヤン・フートによるゲント市現代美術館の「1968年以後のヨーロッパ美術」展にインスタレーション「経済の価値」を発表。
- ・ 8月17日-9月6日 「オルタナティブ・ポリシーとFIUの活動」展 (エディンバラ、リチャード・デマルコ画廊)
- ・ 5月 ウルブリヒト・コレクション—マルチプル化された芸術 1965-1980」展 (ルートヴィヒスハーフェン、ヴィルヘルム・ハック美術館、5月4日-6月22日；デュッセルドルフ美術館、8月10日-9月14日)
- ・ 8月13日-9月10日 ロンドンのアンソニー・ドフェイ画廊にて「チャーマンの家からのストライプス1964-1972」<聞こえる言葉>を展示。
- ・ 9月24日-11月16日 オタワの人類博物館で「グラフィック・ワークス」展。
- ・ 10月7日-11月23日 「素描 平面オブジェ 木版画」展 (カールスルーエ、バーデン州芸術協会)
- ・ 11月24日 ストックホルム王立自由芸術アカデミーの国外名誉会員となる。
- ・ 11月29日-81年2月1日 ボン芸術協会での「象徴と神話」展に「野営地からの出発の前にI」を発表。
- ・ ダルムシュタットのシュトレア・コレクションの一部 (旧クロシャール・コレクションのポップアート70点) が77年のカール・シュトレアの死去により売却された (現フランクフルト現代美術館) ため、匿名の交友グループ (エーリヒ・マルクスとアンソニー・ドフェイ、ハイナー・バステリアンら) が「ブロック=ボイス」の分散を避けるべく活動を始める。81年にシュトレアの相続人との間に一括売買契約を結び、88年にヘッセン州が文

化財団を設立して作品を獲得。翌89年ダルムシュタットに安置の運びとなる。

1981年 (60歳)

- ・ 1月17日-3月8日 <根底>をパリ市立近代美術館で開かれた「今日のドイツ美術」展で発表。
- ・ 2月15日-3月31日 「資本空間1970-1977」展 (チューリヒ、国際現代美術館)
- ・ 4月 ローマ(4-8日)とナポリ (10-17日)に滞在し、前年11月の南イタリア地震とその被害について、<地震> (Terremoto) (ローマ、パラッツォ・ブラスキ、6-7日)と<宮殿の地震> (Terremoto in Palazzo) (ナポリ、ルチオ・アメリオ画廊、17日)を制作し発表。
- ・ 5月29日 ケルンのイエレンベック画廊で<空間:90.000マルク>を発表。タイトルはボイスが作品価格に対する自己決定性を表明してみたものだが、その後当然それを上回って扱われている。
- ・ 8月12-15日 二つの展覧会〔国立近代美術館のメンヒェングラートバハ美術館展 (8月7日-9月13日)とリチャード・デマルコ画廊の写真展「スコットランドでのボイス」(8月15日-9月5日)〕のためにエディンバラに滞在。
- ・ 8月16-23日 アクション<ポーレン・トランスポート> 妻エーファと娘イエシカを伴い、ポーランド従軍時の縁の地を通りながらトラックでウッジの国立美術館に向かう。3日間の滞在で800点に及ぶ自分の作品を設置し、以後の展示に指示を与えて贈呈。
- ・ 9月2日-10月18日 「ミュンヘンのコレクター収集品によるヨーゼフ・ボイス」展 (ミュンヘン、市立レーンバハ・ハウス美術館)
- ・ 9月 女性をテーマとした200点の素描 (ファン・デア・グリント・コレクション)による「女性」展 (ネイメーヘ美術館、9月5日-10月11日; デュッセルドルフ市民貯蓄銀行、11月9日-12月3日; ウルム芸術協会、82年3月7日-4月12日; ハイルブロン芸術協会、5月16日-6月13日)
- ・ 9月9日 ヴィーラント・シュミート、ラーズロ・グローザー、マンフレート・ロメルと「芸術環境または芸術都市? 都市の芸術状況はどのように発展するか」というテーマで討論会。(シュトゥットガルト、キュンストラーハウス)
- ・ 9月18日 カッセルのエンジニア学校で、ウルス・イエーギと「自由の中で学ぶ」というテーマで討論会。
- ・ 10月23日-12月31日 東ドイツで最初のボイスの展覧会「マルチプル化された芸術1965-1981、ウルプリヒト・コレクション」(東ベルリン、西ドイツ常駐支局)。翌年ボンの市立美術館で開催(82年2月10日-3月28日)。
- ・ 11月10日 カッセルでドクメンタ7のプロジェクト<7000本の樫の木>について初めて公表する。

1982年 (61歳)

- ・ 1月30日-3月20日 インスタレーション<最後の空間?> (letzter raum? last

space? dernier espace?) (パリ、リリアン&ミシェル・デュラン=デ
セール画廊)発表。その後タイトルを<洞察者のいる最後の空間1964-1982>
に変更してアンソニー・ドフェイ画廊で展示 (3月27日-5月12日)。

- ・ 2月24日 シンポジウム「近代美術、政治、オルタナティブ生活」(ヴァルパー
ベック、ドミニコ会修道院)
- ・ 6月19日 ドクメンタ7(-9月28日) のオープニングで「7000本の櫛の木」の
一本目を植樹。
- ・ 6月30日 ドクメンタのメイン会場前の広場で、ロシア皇帝の王冠(レプリカ)
を感謝祭用の兎のチョコレート型で鋳直すという<溶解アクション/聖変
化>を行う。
- ・ 8月4-18日 キャンペラの国立美術館が購入したインスタレーション<シャ
ーマンの家からのストライプス>設置のため、オーストラリアに滞在。
- ・ 9月25日-10月31日 ウルブリヒト・コレクションのマルチプル展を機に初
めてノルウェーでの個展(フーヴィリオッデン、ヘニ・ウNSTAD・
アートセンター)。以後83、85年にも素描展が開かれた。
- ・ 10月16日-83年1月16日 「ツァイトガイスト」展の会場、ベルリンのマル
ティン・グロピウス・バウのアトリウムでインスタレーション<鹿の記念
碑(土ヴルスト-ローム-作業場)>と彫刻<ジョージ・マチューナスの
ための鹿の記念碑>を発表。
- ・ 10月27日 ボンで第14世ダライ・ラマと対話。
- ・ 11月 国際交流基金により企画されていたボイスの来日が病状悪化の理由で83
年3月に延期となる。しかし83年1月に再度延期の要請があり、結局計
画は中止となる。
- ・ 11月12日-14日 ハーゲンでの「緑の党」の党大会に出席し、同党から連邦議
会に立候補するべく党の候補者リストへの登録を要請。
- ・ 11月22日-12月11日 東京のギャラリー・ワタリで個展。
- ・ 12月4-10日 「自然の要塞(Difesa della natura)」展(ボン、クライン画廊)
- ・ 12月16日 <7000本の櫛の木>プロジェクトの中間報告会見。1268本の樹木
(その内櫛は490本)が植樹された報告と最後の1本を1987年のドクメ
ンタ8のオープニングに植樹する意向を発表。この計画は妻エーファと息
子ヴェンツェルによって遂行された。

1983年(62歳)

- ・ 1月 デュッセルドルフ北地区の「緑の党」の候補者選考が行われるが、ボイス
はガイレンキルヒェンでリスト上位に掲載されなかったことから選考の翌
日立候補を取り下げる。この年緑の党は初めて連邦議会に進出(~90年)。
- ・ 1月26-27日 ウィーンを訪れ、「芸術と詐称」(26日-TV討論会; P.ヴァイベル、
G.リゲティらと)、「樹木」(27日-工芸大学; J.フート、O.オーバーフ
ーバーらと)のテーマで討論会を行う。
- ・ 2月 「ツァイトガイスト」展に出品した<鹿の記念碑>をブロンズとアルミニ
ウムで鋳造し、インスタレーション<鹿の上に輝く落雷>を5体制作。

- ・ 3月 シュトゥットガルトのコレクター、フレリヒ夫妻を訪ねた折に同地に建設中だった国立美術館(84年開館)を訪ねる。館の所蔵作品が少ないため小さな展示室が当てられているのを見たボイスは複数のコレクターから作品の寄託・貸与案を纏め上げ、最大展示室を獲得する。
- ・ 4月-84年11月 「素描」展が英米5会場を巡回(リーズ市立美術館、4月22日-5月21日; ケンブリッジ、ケトル・ヤード画廊、5月29日-7月3日; ロンドン、ヴィクトリア&アルバート美術館、7月27日-10月2日; ケンブリッジ(マサチューセツ)、ハーバード大学ブッシュ・リーシガー美術館、4月17日-6月17日; ダブリン、ギネス・ヴィジターセンター、8月24日-11月14日)。
- ・ 5月3日-6月 デュッセルドルフのコンラート・フィッシャー画廊で<愚かな箱>を発表。
- ・ 5月 <20世紀の終焉>(1982-83)をほぼ同時期に二つのヴァージョンで発表。第一版(玄武岩21本)は企画展「総合芸術への志向—19世紀からのヨーロッパ的ユートピア」(デュッセルドルフ、州立クンストハレ、5月19日-7月10日; ベルリン、シャーロットテンブルク宮殿、12月21日-1984年2月19日)で、第二版(玄武岩44本)はシュメーラ画廊(デュッセルドルフ)での個展「20世紀の終焉」(5月27日-7月15日)でそれぞれ展示された。
- ・ 7-10月 ロンドンではヴィクトリア&アルバート美術館の「ドローイングと水彩」展(7月27日-10月2日)に合わせてテート・ギャラリーが新収蔵作品<地震>を展示。アンソニー・ドフェイ画廊ではホワイトボックスを用いた「12のヴィトリネー—60年代のフォルム」展(9月9日-10月15日)が開かれた。
- ・ 8月24日-10月30日 フランクフルトのシュテーデル美術館で「素描 1949-1969」 「山の王 1958-1961」を展示。
- ・ 9月16日 連邦議会の緑の党議員団に国民請願と国民評決の導入を要請。また、10月にはフランクフルトとベルリンで貨幣、資本と芸術について講演と討論を行う。
- ・ 11月-85年1月5日 「素描」展が長期にわたり国外を巡回(ローザンヌ州立美術館、11月7日-84年1月3日; ヴィンタートゥーア美術館、1月21日-3月11日; カレー美術館、4-5月; サン・エティエンヌ産業博物館、6-9月; リンツ市立新美術館、11月8日-85年1月5日; マルセイユ市立美術館、1-2月; オスロ、ウNSTADT財団、3-4月)。
- ・ 12月11日-84年1月15日 デュッセルドルフのコンラート・フィッシャー画廊でインスタレーション<受苦の空間—骨の髄まで数える>を発表。

1984年(63歳)

- ・ 1月1日 娘のイェシカと共にナム=ジュン・パイクが企画構成した衛星放送アクション<グッド・モーニング、ミスター・オーウェル>に参加(パリ、ポンピドゥーセンター)。

- ・1-4月 植樹や直接選挙、芸術概念の終焉といったテーマで講演・討論活動を行う。
- ・4月 東ベルリンへの旅行を拒否される。
- ・5月 63歳の誕生日を機に11日から14日まで<7000本の樫の木>プロジェクトで最初に植えられた400本をボローニャに運び、現地の男爵ジュゼッペ・ジュリーニの支援を得て、同地の崖崩れした土地に植樹。13日にはペスカーラのルクレツィア・ド・ドミツィオ画廊が「自然の要塞」というタイトルでボイスとの交流会と植樹アクションを開催。これらの活動によりボイスはボローニャ市から名誉市民号を受けた。
- ・5-7月2日 東京の西武美術館(1989-1999; セゾン美術館)でウルブリヒト・コレクションを中心とした「ヨーゼフ・ボイス」展(6月2日-7月2日)。これに先行してギャラリー・ワタリ(現ワタリウム美術館)で「ボイス+パイク」展が開催される(5月15日-7月17日)。ボイスは5月29日から6月5日まで日本に滞在、講演会(朝日ホール、5月30日)、学生との対話集会(東京芸術大学、6月2日)、ナム=ジュン・パイクとのコンサート<コヨーテⅢ>(草月ホール、6月2日)を行った。
- ・6月3日-9月30日 パーゼル、メリアンパークでの「20世紀の彫刻」展にインスタレーション<熱-造形メートル原器>を発表。
- ・7月24日 ハンブルク州政府は前年にハンブルクの文化庁がボイスに植林計画を依頼していたアルテンヴェアダー、シュピールフェルダーの環境浄化プロジェクトを拒否。
- ・9月-85年11月 ボイスのミクストメディアによる絵画作品の初めての包括的展覧会「油彩 1949-1967」(チュービンゲン、クンストハレ、9月8日-10月28日; ハンブルク、芸術協会、85年2月16日-3月31日; ラティンゲン市立美術館、5月-6月30日; チューリヒ、クンストハウス、9月6日-11月3日)。
- ・9月29日-12月2日 デュッセルドルフのメッセ会場13番で行われた「ここから-デュッセルドルフの新しい芸術の2カ月」展に<基礎Ⅶ/2>と<経済の価値>を出品。
- ・10月19-27日 パリのFIAC(グラン・パレ)でルクレツィア・ド・ドミツィオ画廊が<オリーブストーン>を出展。
- ・11月10-22日 「人間像-キリスト像/第4回展覧会-ヨーゼフ・ボイス」(フランクフルト、ザンクト・マルクス・ニート)
- ・11月14日-85年1月13日 「ウルブリヒト・コレクション新蔵作品」(ボン市立美術館)
- ・11月16日 樫の木のプロジェクトの折り返し点として3500本目を含む6本をカッセルの学校の中庭に植樹する。
- ・11月29日 シンポジウム「貨幣とは何か」パネラー: ヨハン・フライヘア・フォン・ベートマン、ハンス・ビンスヴァンガー。(ウルム、出会いの家)
- ・12月13-16日 リヴォリの現代美術館に<オリーブストーン>を設置するためにボローニャ、トリノ近郊に滞在。

1985年 (64歳)

- ・ 2月8-10日 ヴァンゲンのアーゲントアル自由市民大学でミヒャエル・エンデと「芸術と政治」について対談。22日には「営利はエコロジー破壊の動機となるか?」というテーマでオクスフォード大学で講演する。
- ・ 3月9日 ボイスのコンセプトによる企画展「7000本の檜の木-34人の芸術家がボイスのアクションに向けて作品を提供した展覧会」(テュービンゲン・クンストハレ、3月2日-4月14日; ビーレフェルト・クンストハレ、6月2日-8月11日; カッセル、オランジェリー、8月25日-9月22日)。メルツ、ウォーホル、キア他が参加。
- ・ 3月19日 電通とニッカウイスキーの商業契約を交わし、<7000本の檜の木>プロジェクトに対し40万マルクの資金を得る。
- ・ 3月22日 「ケルン・ロマネスク教会年」の一環としてケルンの聖ガレオン教会堂に3本の菩提樹と玄武岩を植える。
- ・ 5月5日-6月2日 アムステルダム (A画廊: 6月1日) とロッテルダム (ファン・バーヘレン画廊: 「貨幣からのニュース-ロッテルダムの子供たちへ」展) で同時に個展開催。5月末に重い肺疾患を患う。
- ・ 8月11日-9月29日 「十字架+シンボル、ヨーゼフ・ボイスの作品における宗教的素地」展 (アーヘン、スエモント・ルートヴィヒ美術館)
- ・ 8月24日-10月23日 「茶十字」展 (ネイメーヘ美術館)
- ・ 9月1-29日 「フェーリッシュ・コレクションによるオブジェとマルチプル」展 (ドルトムント、アム・オストヴァル美術館)
- ・ 9月3-18日 療養のためナポリとカプリ島に滞在し、<自由はしご>とマルチプル<カプリ・バッテリー・1000時間後にバッテリーを交換>の原型を制作。
- ・ 10月9日-11月16日 アンソニー・ドフェイ画廊でインスタレーション<苦境>(1958-1985)発表。
- ・ 10月11日-12月22日 ロンドン王立美術アカデミーでの「20世紀のドイツ美術-絵画と彫刻1905-1985」展で1室を占有し、彫刻6点を展示。
- ・ 10月23-12月1日 マドリッドとバルセロナ (巡回) の年金基金財団で素描とアクションのドキュメントの展覧会。
- ・ 10月28-29日 ヤニス・クネリス、アンゼルス・キーファー、エンツォ・クッキとバーゼルのクンストハレで討論。
- ・ 11月20日 ミュンヘンのカンマーシュピールで講演「自国: ドイツについての発言」。
- ・ 11月29日 ハンブルク造形芸術大学での「三台のピアノによる同時コンサート」に電話回線によってデュッセルドルフから出演 (共演: ヘニング・クリスティアンゼン、ナム=ジュン・パイク)。
- ・ 12月23日-86年5月31日 ナポリのカーポディモンテ美術館に<パラッツォ・レガレ>を発表。本人による最後のインスタレーションとなる。

1986年 (64歳)

- ・1月12日 デュイスブルク市よりヴィルヘルム・レームブルック賞を受け、同市のヴィルヘルム・レームブルック美術館での授賞式で受賞講演を行う。
- ・1月23日 デュッセルドルフ、オーバーカッセルの自宅のアトリエにて死去。遺灰は4月14日に三つのブロンズの壺に入れて北海に放たれた (54° 07,5' NO, 8° 22,0' E)。

参考文献

本年譜作成にあたり、主に以下の文献を参照した。70年代後半以降の個展については一部を省略し、参加企画展は主要なものに限定している。

Götz Adriani (u.a.), Joseph Beuys, Köln, DuMont, Neuaufl., 1994.

Joseph Beuys, exh.cat., Musée national d'art moderne/Center George Pompidou, Paris, 1994.

Joseph Beuys, Ausst.Kat., Kunsthaus Zürich, 1994.

Uwe M. Schneede, Joseph Beuys. Die Aktionen, Ostfildern-Ruit bei Stuttgart, Gerd Hatje, 1994.

(さんぼんまつ ともよ・東京大学大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻博士課程/表象文化論、現代美術)